（第八段）御狩の御行

*さてかぐや姫、かたちの世にも似ず、めでたきを、みかどきこしめして（こうしたことがあってから、かぐや姫が世にも稀な美人だということを、帝がお聞き召されて）、 *「さて」は、此処では＜そして。それで。それから。その後。＞などと語用する接続詞だろうが、この物語では数少ない時間経過を示す言い方なので、此処までの出来事を少し整理して置きたい。とはいえ、「いまはむかし」と不特定の過去を示されて始まる話なので、絶対時間を知る術はなく、何処かの時点からの経過時間を知るだけだが、それさえ相当に曖昧だ。かぐや姫が発見されてから成人するまでは「三月ばかりやしなうほどによきほどなる人になりぬれ」と本文に明示されているが、それ以降は時折数字は示されるものの基点が不明なので、どうしても推論による仮説として考えざるを得ない。で、此処までの所は妥当性がありそうな「全集」の解説にほぼ従って、成長 3 ヶ月＋求婚 3 年＋難問回答 3 年の 6 年あまりが、かぐや姫の物語として語られて来ていて、今現在のかぐや姫は 12 歳+3 歳+3 歳で 18~9 歳を見当する。

「さりとも、我召さむには、まゐらざらむやは（そうであっても、私が仕えるように召し出す分には、参内しないことがあろうか）」とおぼしめして、*内侍、なかとみのふさこにのたまはく（と思いあそばして、側近女官の中臣房子に仰せになるには）、 *「内侍なかとみのふさこ」は、このように文が示されているのだから、「内侍」が漢字で「なかとみのふさこ」が平仮名で写本されていたのだろう。「全集」注には＜「内侍」は掌持（ないしのじょう）のこと。天皇に常に奉仕して、奏請（そうじょう）・伝宣などのことを司る。中臣氏は祭祀を司る家柄。＞とある。「掌持」は、古語辞典に「尚持（ないしのかみ、長官）」「典持（ないしのすけ、次官）」に次ぐ＜「内侍の司」の三等官。＞とあり、「内侍」というと＜「掌持」に同じ。＞ともある。内侍司は天皇が公人なので官人だが、天皇の私的な居室であるが故に、基本的には男子禁制たる後宮において、諸事雑務を担う女手だから、公務員といっても天皇と個人的な繋がりが深く、その意味ではある種、重役にも通じる人脈を、実際には形成するのだろう。それにしても、此処で内侍の個人名が語られることには、いくらかの意外性が私には感じられる。少なくも、何の意図もない、とは思えない。

「*おほくの人の身を、*いたづらになして、あはざなるかぐや〈*姫はいかばかりの女ぞと、まかりて見てまゐれ（我が同胞や朝臣たちの多くの身を滅ぼしても尚、結婚に応じなかったというかぐや姫が、どれほどの女であるものなのか、御許が出向いて見て参れ）」とのたまふ（と仰せになります）。ふさこうけたまはりてまかれり（房子は承って下がりました）。 *「おほくのひと」とは、石作皇子、倉護皇子、安倍右大臣、大伴大納言、石上中納言、のことだろうから、彼等は天皇から見て兄弟

や子に当たる親族だったり朝廷の重鎮たる朝臣たちで、単に＜大勢の人＞というには大物過ぎる。これらの人々が一気に失脚したり死んだりしたのでは、世情不安定となり、内乱も起こりかねず、場合によっては国が傾く。いくら作り話、それもおとぎ話の要素が強い物語、とはいえ、私には是が余りに呑気な物言いに聞こえる。なので、少し憤慨や怒りを滲ませた言い方を試みたい。 *「いたづらになす」は＜死なせる＞という言い方でもあるようだが、此処では「身を（立場・人生を）」を受けて＜台無しにする→滅ぼす＞と言って置く。結果として、「全集」訳に倣う形だ。 *「姫はいかばかりの～かぐや姫かたち」までは、長文の補訂であるらしい。全くの脱稿だとしたら、是は何を根拠に補訂されているのか。確かに、この補訂部分を省いたのでは意味の通る文が成立しないようで、何らかの補訂は必要なのだろう。そして、この補訂部分は「全集」文にほぼ同じなので、校訂者の上原作和氏は流布本系本文を参照したのかもしれない。いや、違うのかもしれないが、古本と流布本との関係や、この物語の現存形の成り立ちに、ということは即ち、現在形に至る作文意図やそれ以前の形の類推などに、何らかの示唆を与え得る箇所のように見えて興味深い。

竹取の家に、かしこまりて*しゃうじいれてあへり（竹取邸に於いては、恐縮して天皇の遣いである内侍を招き入れて応対しました）。*女に、内侍のたまふ（応対に出た美奴の妻に、内侍が天皇のご意向を告げるに）。 *「しゃうじいる」は＜招き入れる＞。だが、勅使の応対とはどうするのだろう。やはり南表の南廂に迎えるのだろうか。分からないので、補語は避ける。ただ、「全集」注にある＜帝の使者が女性であるため、いままでとちがって、「嫗」が応対したのである。＞という指摘は納得し易い。 *「をんな」は「全集」文には「嫗（おうな）」とある。この違いが意味する所は私にはよく分からない。が、基本的に私は当本文を真じる立場なので「女」で読みたい。ともあれ、私はこの人をこれまでは多く＜妻＞と言って来たが、「翁」が次第に＜養父＞の立場で落ち着いて来たように、話はかぐや姫に対する立場で語られる場面が多くなるので、「女」も＜養母＞と呼ぶ方が馴染むのかもしれないが、この場面では「竹取の家に」とあるので、当主である翁の＜妻＞の立場を示して置く。

「おほせごとに、かぐや姫、かたち〉、いとけうらにおはすなり（帝の仰せ言に、かぐや姫は容姿が非常に美しくいらっしゃるようなので）、よく見てまいるべきよしの給へるになむ、まいりきつる（よく見て参れとの仰せによって、参りました）」といへば（と言えば）、「さらは、かく申〈し〉侍らむ」といひていりぬ（かぐや姫の養母である美奴の妻は「それでは、そのようにかぐや姫に申します」と言って、御簾内に入りました）。

かぐや姫の*もとに（妻はかぐや姫の所に行って）、「はや、このつかひに、たいめんし給へ（すぐにこの使者にお会いなさい）」といへば、かぐや姫（と言えば、かぐや姫は）、「よきかたちにもあらず、いかでか、見ゆべき（私は美人ではないので、どうして御使者にお会いできまし

よう）」といへば（と言えば）、　*「もとに」は伝言ではなく＜本人が（直接）相手に向かって＞と取って置く。妻はかぐや姫の実体に最も近く接している人なのだろう。

「うたて物の給〈ふ〉かな（困ったことをお言いだねぇ）、はや、たいめんし給へ（早くお会い申しなさい）。御門の君の御つかひは、いかでか、おろかにせむ（天皇さまの御使者を、どうして軽々に遇せましょう）」と*いへば、かぐや姫のこたふるやう（と養母が言えば、かぐや姫の答えようは）、　*「言へば」の主語は「女」だが、此処ではかぐや姫に対する立場なので＜妻＞ではなく＜養母＞と呼ばないと似合わない。むしろ、今後の多くの場面は＜養母＞で通すべきかもしれない。

「御門の*めしてのたまはむこと、*けしうかしこしともおもはず（帝が私を妻にしてくださることは、特に畏れ多いとも思いません）」といひて、さらに見ゆべくもあらず（と言って、いっこうに内侍に会う様子がありません）。産める子のやうにあれど（養母はかぐや姫を自分が産んだ子のように思い親しく接しているが）、いと心はづかしげに（この時は気後れするほど毅然として）、*おろそかなるやうにいひければ、心のままにもえせず（天皇に対して不遜な態度で言うので、養母の考えにかぐや姫を従わせられません）。　*「召して宣はむ」は＜呼び出してお声掛けくださる→妻の一人にしてくださる＞とのように、かぐや姫自身の処遇としてしか見ていない、ということなんだろう。帝が女を妾奉公に出仕させるということは、その女に妃の地位を与えるということであり、延いては竹取一族を高処遇するという意味だが、其処までの意味を汲めば「けしうかしこしともおもはず」とは言わないだろう。　*「けしう」は古語辞典に「異しう」と表記があるから＜異常だ。奇異だ。特別だ。＞という副詞なのだろう。ただ、実際の語用は多く下に否定・反語を伴って＜特に、たいして～ではない＞という言い方になるらしい。　*「おろそかなるやう」の対象体は「御門」に他ならない。私には、是は結構な意外性のある文だ。明治政府以降の軍事国家体制に於いて、天皇を神格化した悪意は残念だが、また南北朝期の皇位の軽さも血生臭すぎる嫌いがあるが、概して、是は 1951 年生まれの私が日本国で生まれ育ち、この国の中だけで暮らしてきた感想からする勘に過ぎないが、やはり島国の閉鎖性に於いて、今日のように私的な意見が容易に文字に残せる環境ではない時代の中で、数百年に渡って、変遷はあるにせよ、同じ物語が語り継がれて来たとしたら、現在に至るまで続いている天皇家への敬意を文書上には示すべきとする暗黙了解は根強かったような気がするので、天皇を「おろそかなるやうにいふ」という文が、此処にリキミも無く記されていることは非常に興味深い。尤も、貴族社会での内々のバレ話とはいえ、「源氏物語」に於いて、天皇に一切の神聖視が向けられていないどころか、文化を気取る尊さに価値観を認めるものの、また身分社会の規範としての敬語遣いを煩く示すものの、その生活実態は全くありふれた普通の人々として、馴れ馴れしく天皇家の内情が語られているので、他の記録文章に天

皇を「おろそかなるやうにいふ」態度が示されても別に驚くには値しないのかもしれないが、実際に古くから語り継がれた物語が、残念ながら平安時代の記録文書は無く、せいぜいが室町時代の写本記録らしいが、それでも数百年前に書き留められた文章として残っている事実に触れるかと思えば、やはり感慨深い。それが例え、かぐや姫の超人性を示す文でもだ。

*翁、内侍のもとにかへりいでて（養母は内侍の前に出戻って）、「*くちをしく、このをさなきものは、こはく侍〈る〉物にて、たいめんすまじ（情けないことに、この至らない未熟者は強情でございまして、自分は美人ではないと言って、対面致しません）」と申〈す〉（と申します）。 *「翁」は赤字なので改訂文らしいが、何をどう直したのだろうか。しかし、下に「帰り出でて」とあるから、文脈からすれば是は「女」であるべきだ。「全集」文では此処は「嫗」としてあり、それで文意が破綻しないなら、私も「女」で読んで置く。 *「口惜し」は＜不本意だ。残念だ。情けない。＞と古語辞典にある。が、謙譲意を示す言い方ではなさそうで、内侍に対して養母も謝意を示さないのは面白い。

「『いかで、かならず見てまいれ（かぐや姫がどれほどの器量なのか必ず見て参れ）』と、おほせ事〈ありつるものを（と帝の仰せ言がありましたものを）、見たてまつらでは、いかでか帰りまゐらむ（お会い申せずには、どうして御所に帰り参れましょうか）。

国王のおほせごとを〉ば、*まことも世にすみ給はむ人の、うけ給はりたまはでありけむや（国王の仰せ言を、本当にもう、この世に住みなさろうという人で、お聞き申しなさらないということがありましょうや）。*いはれぬ事なし給そ（話にならないことをなさいますな）」と言葉はげしう言ひければ（と言葉激しく内侍が言ったので）、 *「まことも」は強調句、または強調口調の常套句で、何処と言うよりは文意全体を強く訴えている、のだろう。 *「いはれぬこと」は、「言ふ（説明する。理屈を通す。）」の未然形「言は」＋可能意の助動詞「る」の未然形「れ」＋打消の助動詞「ぬ」の連体形「ぬ」＋抽象名詞「こと」、で＜理屈の通らないこと→ワケの分からないこと＞。

これ〈をききて、ましてかぐや姫、あふべくもあらず（是を聞いていっそうかぐや姫は頑なに内侍に会おうとせず）、「国王の〉おほせ事そむかば、はやう、殺し給〈ひ〉てよかし」といふ（「国王の仰せ言に背いているなら、早く私を殺しなされば良いでしょう」と言います）。

内侍かへりまゐりて、かぐや姫の、見えずありぬる事を、ありのままに奏す（内侍は御所に帰

り帝の御前に参上して、かぐや姫が会いに出てこなかったことを、ありのままに奏上します）。御門きこしめして〉、「おほくの人ころしてける*心ぞかし」との給〈ひ〉て（帝はこの報告をお聞きあそばして「なるほど、多くの人を害してきたのは、その強情ぶりらしい」と仰せになって）、 *「心ぞかし」は、「ぞ」が断定強調の係助詞なので、「心ぞ」で「多くの人殺してける」原因を＜その性格だ＞と判定したことを示す。是は犯人を突き止めた憎悪を込めた言い方だ。が、「かし」は＜だがしかし＞と対象を別の視点から見直す心理作用を示していて、そのかぐや姫の「心」は＜なるほど、一面ではそうした憎悪対象だが、他面では尚も興味深い＞と帝が助平心を見せる微妙な表現だ。で、そういう時の発言は＜～であるらしい＞と対象を不確かなものと客体視する言い方になる。

やみにけれど、なをおぼしおはしまして（その場はそれで終わったが、帝は尚もかぐや姫のことを考えていらっしゃって）、「この女の*たばかりにやまけむ」とおぼして*おほせたまふ（「他の者はいざ知らず、余はこの女の思い付きで人を試した戯言に屈するまい。断固従わせる」とお思いになって、竹取家の当主である養父を呼び出しなさって、仰せになります）。 *「たばかり」は＜策略＞だ。が、帝は房子の報告を聞いて、かぐや姫の本質を「心ぞ」と断じた。そして、その「心」は房子の話を聞く限りは、養母の言った「強く侍るもの」という属性に違いない。ただし、帝はその断定に幾分の猶予を持って臨んでいた。やはり、単に「強情」で済ますには、相手が大物過ぎる。もし是が実話に基づく物語なら、必ずやその背景には国家転覆の陰謀や内乱時の情報戦という様相があったはずだ。この「たばかり」という語にはその名残があるのかもしれないが、それは仮説だ。少なくも、この物語が語り継がれてきた関心は＜国家転覆陰謀譚＞にではなく＜超人譚＞にあったのだろう。となると、この「たばかり」は変化の者の＜たぶらかし＞という意味で語用されていると見る他は無い。つまり、この「たばかり」は＜陰謀＞という重い語感ではなく、かぐや姫の個人的な＜悪戯＞という軽い語感と取るが、私を含めて多くの読者は、かぐや姫の存在を決して軽く受け止めていないので、是はあくまでも帝がそう思った、または、そう思い込みたかった、という文意に解す。 *「仰せ給ふ」は「全集」注に＜（下に）「翁よろこびて家にかへりて」とあるように、翁は帝に召されて参内したのであるから、「翁を召して仰せたまふ」とあるべきだが、この物語ではこのような省略的書き方が多い。＞とあり、訳文に＜竹取の翁を召し出されてご命令を出される。＞と補語が施されている。妥当に思うし、古文の言い換えにおいて補語を示すことは、解釈の説明に他ならず、むしろ必須で、ただしその場合に論理過程の補別記を伴うことは当然だ。

「汝がもちて侍る、かぐや姫たてまつれ（お前が家に置いているかぐや姫を出仕させ申せ）。かほかたちよしと*きこしめして、御使を賜びしかど、かひなく見えずなりにけり（容姿が

良いとお聞きあそばしなされて、御使者を指し向かわせ遊ばしたが、本人に会えず無駄となった）。『かく*たいだいしくやは、*ならはすべき（このような不遜な態度は糺すべきではないのか）』とおほせらるる（と帝は仰せです）」（と側近が養父に告げます）。 *「きこしめす」は「全集」注に＜みずからの動作を尊敬していう自敬語。翁のような身分の卑しい者に帝が直接話しかけることはないから、仲介者の敬意が入りこんだとも解しうるが、（中略）、やはり自敬語とすべきであろう。＞とある。自敬語だとしても、言い換えは丁寧語に見做さないと現代語にならない気がするが、この場面では、私はむしろ仲介者の弁と見做したい。 *「たいだいし」は古語辞典に＜（ 形シク ）なおざりである。不都合である。怠慢である。もってのほか。＞などとある。此処では＜不遜だ←行儀が悪い＞あたりだろうか。現代語に引き継がれていないので語感が分からない。なお、「たいだいしくやは」は＜たいだいしく（ある）やは＞の略だろう。 *「ならはす」は「習はす」で＜学ばせる。習慣づける。＞の他に＜こらしめる。＞とも古語辞典にある。

翁うけ給はりて御返〈り〉事申〈す〉やう（養父は帝の仰せをお聞き申し上げてお返事申すに）、「この女の童、たえて宮づかへつかうまつる*べくもあらず侍〈る〉を、もてわづらひ侍〈る〉（私の所の小娘は、まったく宮仕えにお仕え申せるような者ではございませんので、斯様なお話は困惑いたします）、さりともまかりて*おほせ給はむ（ですが、引き下がって、仰せの如く）」と奏す（と奏上します）。 *「べし」は規範意で＜相応しい＞と解す。 *「仰せ給はむ」の主語は帝で、助動詞「む」は実現推意語用だろうから、これは＜仰せ言を賜るようになる＞という言い方なのだろう。となると、本来は下に＜べくつかへまつらむ＞などが省かれた文型なのだろうが、仰せ言の命令意が強いために「べし」の推意が逃げ口上に聞こえるので、それを言うのさえ憚られた、ということかと思う。

これをきこしめして、おほせたまふ（是をお聞きあそばして、帝は仰せになります）。「などか、翁の心にまかせざらむ（どうして女の処遇が、当主の意向に沿わないことがあろうか）。この女、もし、たてまつる物ならば、翁に*かうぶりを、などか、賜ばざらむ（この女を出仕させ申せば、翁を五位に叙さないことがあろうか）」とおほせ給〈ふ〉（と仰せなさいます）。 *「かうぶり」は「冠」で＜五位に叙せられること。叙爵。＞と古語辞典にある。「五位」は天皇の居間である殿上の末席に昇殿できる地位ということで、晴れて殿上人に出世するということらしい。ということは、今現在は翁は階段下の庭先で帝に拝謁しているワケだ。帝は御簾内に居て姿は見えない。

翁よろこびて、家に返〈り〉て、かぐや姫にかたらふやう（養父は喜んで家に帰って、かぐや姫

に話し聞かせるには）、「かくなむ御門のおほせ給へる（このように帝は仰せになっていらっしゃる）。なをやは、つかうまつりたまはぬ（それでも、尚まだ、出仕申しなさいませんのか）」といへば、かぐや姫、こたへていはく（と言えば、かぐや姫は答えて言うことに）、

「もし、さやうの宮づかへ、つかうまつらじとおもふを（もし、私がそのような宮仕えは致しませんと思うのを）、しゐて、つかうまつらせ給はば、*え生けるまじく、*消せなむず（強いて、父君が出仕させなさるなら、生きていない方が良いので、私は消えなければなりません）。 *「え生けるまじく」の「え～まじく」は＜～とならないように→～でない方が良いので＞。「生ける」は、「生く（いく、生きる）」の已然形「生け」＋状態の助動詞「り」の連体形「る」からなる＜生きている（私）＞という言い方で、否定意の助動詞「まじ」に掛かる。 *「消せなむず」は難解だ。「なむず」は「全集」注に＜「なむとす」の略。「なむ」の意味を強めた形。＞とある。「なむ」は古語辞典に＜完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」のついたもの。活用語の連用形につく＞と解説があり、語用は＜きっと～だろう。～してしまおう。＞などとある。で、「消せ」だが、これは「消す（けす、見えなくする）」の已然形では「なむ」に活用法として繋がらないし、意味も成さない。で、この「消（け）」は、どうやら古語辞典にある＜「消ゆ（きゆ、消える）」の未然形・連用形「消え」から転じた活用（変）形＞の連用形に当たるようで、「せ」は行動動詞「為（す、する）」の未然形「せ」だろうから、この「消せ（けせ）」は＜消えることをする→消える＞のようで、だったら初めから「消えなむ」で良さそうだ。が、多分この言い方は「消せ・なむ」ではなく「消・せなむ」で＜消えてしまおう＞ではなく＜消えなければならない＞かと思う。

みづから、かうぶりたてまつるをおもひて（私から父君を殿上にお乗せ申すつもりで）、*いかがはせむ、一時ばかりつかうまつりて、死ぬばかりなり（もうこの上は、形ばかりに出仕申して、あとは死ぬだけです）」 *「いかがはせむ」は＜どうしよう。どうにもならない。いたしかたない。＞とある。ほぼ成句で、文全体の強意語調を示す副詞のようだ。

翁いらふるやう養父が答えるには）、「かく*ゆゆしき事な給〈ひ〉ぞ（何とひどいことを、止めなさい）。つかさかうぶりも我子を見たてまつらずは、なににかはせむ（この老人が官位を得ても、我が子の栄光を拝し申さずでは、何にもならない）。 *「ゆゆし」は＜不吉だ。いまわしい。＞という形容詞のようで、動詞が「の給ふ」なら「ゆゆしきこと」を目的語にして＜縁起でもないことを言うな＞くらいの言い方にも見做せるが、此処の動詞は「給ふ」なので通常の文型は疑わしい。この文は「かくゆゆしきこと、なたまいぞ」で、説得と言うよりは制止の強い語調ではないだろうか。

さはありとも、などか、宮仕へをし給はざらむ（それにしても、なぜ宮仕えをなさいませぬ）。かからむに、死に給べきやうやはある（そのことで、死になさる理由があるのですか）」といふ（と言います）。

「なを空事かと、つかうまつらせて、死なずやはある、と心み給へ（まだ嘘だとお思いなら、私を出仕させて、死なずに居るかどうか、試してください）。あまたの人の心ざし、おろかならざりしを、むなしくなしてき（多くの人の求婚が熱心だったものを、私は実らせずにしてきました）。人のおもひは、おとれるもまされるも、おなじ事にてこそあれ（人の情熱は臣下の劣る身分であっても国王の高い身分であっても同じ事ですので）、*昨日今日も、御門のの給はむにつかむ、人聞き*やさし（他の人が去った今日日であっても、帝の仰せには従うというのでは筋が通りません）」といふ（とかぐや姫は言います）。 *「きのふけふも」の「も」があるとなしではずいぶん違う。「昨日今日」は＜ここ最近＞だから、「も」がなければ＜最近になってちょっと言われたからといって簡単になびくのは＞という文意になる。が、「も」は此処では逆接の接続助詞としか読めないので＜以前は受け入れなかったのだから、最近であっても求婚に応じるのは＞という文意になる。どちらでもそれなりに文意は通るが、「昨日今日も」という言い方なら、普通は「も」は列挙の係助詞語用で＜以前と同様に、昨日も今日も＞という言い方になるので、この逆接の文意は読み辛い。 *「やさし（優し）」は古語辞典に＜（形シク）「痩す（やす、痩せる）」の形容詞化。肩身が狭く身もやせるような思いであるというのが原義＞と解説があり、語用は＜つらい。恥ずかしい。きまりわるい。優美だ。上品だ。＞などとある。しかし、此処でかぐや姫が話す理屈はまるで現代人だ。理屈自体は単純だが、またそれだけに、帝の絶対性を認めない姿勢には、少なからず驚く。

翁こたへていはく（養父が答えて言うには）、「天下の事は、とありとも、かかりとも（天下を動かす帝の仰せとは言え）、御命のあやうき、おほきなる障りなれば（あなたの命が危ぶまれるのは、大きな不幸なので）、なを*かなへつかうまつるまじきことを申さむ（やはり結論としては、お仕え申せないことをお答えしよう）」とて、まいりて申〈す〉やう（として、参内して申し上げるには）、 *「かなふ」はハ行下二段活用の他動詞で＜適合させる。条件があうようにする。＞とある。「かなへ」は＜総合的に勘案して→結論として＞だろうか。

「おほせごとのかしこさに（御言葉のもったいなさに）、女の童を『まいらせむ』とつかうまつれ

ば（娘を『入内させよう』と努め申しましたが）、『宮仕へいだしたてば、ただ死ぬべし』と申〈す〉（娘は『宮仕えに差し出すなら死ぬだけだ』と申します）。

＊宮つこまろが、手に産ませたる子にもあらず（この娘は、この美奴が妻に手を掛けて産ませたという実の子ではありません）。むかし、山に見いでたる物に侍り（昔、山の中で見つけ出したものでございます）。かかれば、心ばせも世に似ずぞ侍〈る〉（そういう変わった出自のものなので、考え方も世間並とは違っております）」と＊奏せさす（と奏上いたします）。 ＊「宮つこまろ」は翁の自称らしい。物語の冒頭紹介では「名をばさるきのみやつこといひける」とあった。「さるきのみやつこ」と仮名表記だったので、私は面白がって「猿木美奴」と漢字を当てておいたが、此処に来て「宮つこまろ」と自称されては処理に困る。「まろ」は自称代名詞とあり、それを接尾語用しても＜わたくし宮つこ＞くらいの言い方と見做せそうで、ざっと＜丸＞を当てて置きたい。が、「宮つこ」の「宮」が本文で漢字表記されているのには、一方で無視し辛く、一方で従うには抵抗感があって、対処に悩む。が、「宮」は「御屋」の語感が強く、どうも竹取翁に似合わない。それに、元々この話は、小話口伝で済むような短篇では無いので、物語としての成立には文書化は必然に思えるが、それが漢字文だったという証明は無いし、漢字文だったとしても「宮」が原型とも限らないし、どうせ是は写本筆記者の当て字だろうと思い切って、どうせ思い付きなら私は「美奴」で押し通すことにする。 ＊「奏せさす」はサ変活用他動詞「奏す」の未然形「奏せ」＋尊敬の助動詞「さす」が付いた二重敬語。丁寧語で言い換えて置く。

御門、聞かせおはしまして（帝は是をお聞きあそばして）、「＊へんげの物にてさいふにこそ、いかがはせむ（霊験ある者であるのでそう言う、ということであるなら、致し方無い）。＊御覧じにだにも、いかでか御らんぜむ（その姿だけでも、なんとかご覧になりたい）」とおほせ給ふ（と側近をして仰せなさいます）。 ＊「へんげのもの」は＜化け物＞をいう時もあるようだが、この言い方で帝がかぐや姫の辞仕の言い分を納得したようなので、此処では是を＜霊験ある者＝神懸った超人＞と言って置く。非常に重要な語に見える。 ＊「御覧じ」は「ごらんず（「見る」の尊敬語）」の連用名詞で＜ご覧になること＞。「御覧じにだにも」は＜ご覧になるだけでも＞。「御らんぜむ」は「御覧ず」の未然形「御覧ぜ」＋意思表示の助動詞「む」で＜御覧ぜよう→ご覧になろう→ご覧になりたい＞。

「これをいかがせむ」と奏せさす（「どうしたものでしょう」と竹取翁は奏上いたします）。御門おほせ給はく（帝が仰せ賜るには）、「宮つこまろが家は、山もちかくなり（美奴丸の家は山に近いのだろう）。御狩りに御行し給はむやうにては見てんや（御狩りに行幸なさるようにし

て見れないか）」との給へば、宮つこまろが申〈す〉やう（と仰せなので、美奴丸が申すには）、

「いとよき事なり（名案です）。なに心もなくて侍らむに（娘が何も知らずにいるところを）、ふと御行して、御覧ぜむに、御らんぜられなむ（何気なく御行して、御覧なされば、ご覧になれましょう）」と奏すれば、御門*おほせ給はく（と奏上すれば、帝が仰せ賜る通りに）、*にはかに日をさだめて、御狩に出〈で〉給〈ふ〉（さっそくに日を定めて、御狩りに出掛けなさいます）。 *「おほせ給はく」とあるが、下に発言文は無い。脱稿や誤写の可能性も高いと思われるが、この「給はく」は「給ふ如し」の連用形「給ふ如く」とあった漢文風古文を仮名文に換える時に現れた略と見做して、というのも如何にも強引な思い付きだが、意味が通る現代語文として＜仰せの如く→仰せの通りに＞と言って置く。 *「にはかに」は＜急に。だしぬけに。突然に。＞という言い方が多いらしいが、此処では＜さっそくに＞くらいか。

御狩し給〈ひ〉て、やがて、かぐや姫の家にいたり給〈ひ〉て*見給〈ふ〉に、ひかりみちて、けうらにてゐたる人あり（帝は御狩りをなさって、休憩場所から密かにわずかな側近とだけで脱け出し、かぐや姫の家に到着なさって、美奴の手引きでかぐや姫の居間に近づき、部屋の中を覗き見なさると、数人の女房たちの中に、光満ちて美しく座している人がいました）。 *「見給ふに」は場面転換が唐突で舞台像が描けない。いや、そんなことを言ったら、この物語は全体に粗筋を追っていて、分からないのは舞台設定のみならず登場人物も全体の構想も掴み所が無く、言ってみれば面白い話を繋ぎ合わせただけのような印象さえあり、そもかぐや姫の存在自体からして現実味は薄い。ところが、此処には帝が登場しているのである。帝の御行は、そこいらのハナタレ小僧が近所をうろついているのとは全く違う、様式化された祀り事である。それが、他人の家の土間に紛れ込んで、座敷に居た女の子に手を出した、としか読めないような書き方で、どこをどう納得すれば良いと言うのか。帝が一人で勝手にフラフラ動き回るのは有り得無い。また、従者に探させるとなると大騒動だ。第一、竹取家は野中の一軒屋なのか。それも、急に現れた男に驚いた女が逃げ出せない三畳一間しかない家だったのか。言い出せばもう目茶苦茶だが、全てに目を瞑って読み進むしかなさそうだ。しかし、こうなったら、私なりに想像を逞しくして、少しでも可能性がある場面を得るべく、大幅に補語して言い換えてみたい。

「これなむ」とおぼして、逃げいる袖をとらへ給へれば（「この者に違いない」と帝はお思いになって、襖を開け放って入室なさり、隣室に逃げ入ろうとするかぐや姫の袖を掴みなさると）、おもてをふたぎて、*逃げあへて（かぐや姫は顔を隠して逃げ切ろうとして）、 *「逃げあへて」の

「あへて」は「敢へて」なのだろう。「敢ふ」は＜堪える。適う。＞だが、古語辞典に＜他の動詞の下につけて、押し切ってそうする意を表す。＞という語用が解説されている。だから、この「逃げあへて」は＜逃げ切ろうとして＞という言い方なのだろう。が、そうなると下文には逃げ切れずに部屋に留まっている状態が示されるので、文意が繋がらない。この不都合を解決するには、この「あへて」が「あへで（逃げ切れずに）」の打ち消し文になっていれば良かったのだが、生憎そうなっていない。当然、勝手な本文変更など出来ようもない。従って、下文に打ち消し文を補語して置く。

おもてに袖をおいて、*さぶらひければ（しかし、それは適わず留め置かれので、顔を袖で隠して、控えていたが）、はじめよく御覧じてければ、たぐひなくめでたくおぼえさせ給〈ひ〉て（帝はかぐや姫の顔を先に覗き見ていて、初めにその顔立ちをよくご覧になっていたので、例えようも無く愛しく思いあそばして）、 *「さぶらひければ」の条件項は順接の＜控えていると＞という言い方で下に続くのだろうと思って読み進むと、文意としては「袖を置く（「おいて」は「おきて」のイ音便）」が順接条件で、「さぶらふ」は形態説明なので、現代語文としては、逆接というわけではないが、状況を客観的に示す＜～であったが＞という言い方になりそうだ。

「*ゆるさじとす」とて（「放すものか」と言って）、*いでをはしまさむとてするに（手を取ったまま、部屋から出ていらっしゃろうとすると）、かぐや姫、こたへて奏す（かぐや姫は答えて奏上します）。 *「ゆるす」は「緩す」で＜緩める。放す。＞と古語辞典にある。「じとす」は「全集」注に＜「じとす」は「むとす」の反対。「じ」（打消意志）をさらに強調していったのである。＞とある。 *「いでをはしまさむ」は多分「出でおはさむ（出て行き掛かりなさる）」の換字で敬語遣いだから、これを発言文として括弧内に校訂すると自尊表現ということになる。雲上の天皇であってみれば、そういう言葉遣いもあるのかもしれないが、直前の「緩さじとす」に敬語遣いがないことからして、この文は地文と見做して括弧を外したい。なお、「全集」文ではこの部分は地文校訂で「率ておはしまさむとてするに（連れていらっしゃろうとすると）」となっている。此処の文に関しては、文意と校訂ともに「全集」に分がありそうだ。が、とにかく今の私は当本文を真じる立場なので、「全集」文を参照して文意を補語しつつも、当本文に沿って言い換えて置く。

「をのが身は、この国に生まれて侍らばこそ*つかい給〈は〉め（私がこの国に生まれていましたのなら、あなた様は私を召人として奉仕させなされたでしょうが）、いと、出〈で〉おはしましがたくや侍らむ（私は他国の生まれなので、このまま私を連れて出ていらっしゃるのは、大変難しいことでございましょう）」と*聞こゆ（と申し上げます）。 *「つかい給はめ」は「使ひ給はめ」のイ音便。「使ふ」はハ行四段活用の他動詞で＜人を仕えさせる。物を用いる。＞という言い方。ハ行下二段活用の自

動詞「仕ふ」は＜仕える。＞。此処で言う「仕える」は妾として肉体奉仕する、ということだ。他の諸侯がかぐや姫の顔も見ずに去ったことを思えば、帝は別格の肉薄ぶりで、この場面あたりは一種のハイライトかもしれない。また、「たまはめ」の已然形は「こそ」を受けた係り結びだが、此処では言い切りではなく、接続助詞「ど」が内意された逆接で下文に続く。 *「聞こゆ」は謙譲語だが尊敬語ではない。「奏す」が形式的に人を介して話す語感なのに比して、「聞こゆ」は直接相手に言う語感だ。二人の接近ぶりを示すか。

御門、「などかさはあらむ。なを強いて*おはしなん」とおほせ給〈ひ〉て、*御輿よせ給ふに（帝は「どうしてそんなことがあろう。いっそう強引に致しましょうぞ」と仰せなさって、御狩り本隊に従者を走らせて、御輿を軒先まで呼び寄せなさると）、このかぐや姫、*きと人の影になりぬ（このかぐや姫は、パッと透けて人影だけになってしまいました）。 *「おはしなん」は、帝の発言文と明示されているので、紛れもなく自敬語だ。が、「いらっしゃろうぞ」という言い方は現代語にはないので、丁寧語で言い換える。 *「おおんこしよせたまふ」は手車を呼び寄せたということではあるのだろうが、私は此処で場面が大転換したと読んで置く。即ち、帝は御狩りの途中で微行に脱け出して、この竹取邸に来ていたのだが、此処で一気に権威を振りかざして、御狩り一行本隊を呼び寄せた、と見て置く。と言ってみても、この補語が現実味のある展開かどうかは分からないが、せめてもの工夫だ。 *「きと」は古語辞典に＜さっと。急に。＞などと語用例示があり、補注に＜「ふと」よりも強い感じ＞ともある。瞬時の変化には違いないんだろうが、「ふと」の静けさとは違う場面での語用が多いということか。マ、「感じ」だから、別の言い方は可なんだろう。

「はかなく、くちをし」とおぼしめして（掴んでいた手が空を切ったので、「虚しく、残念だ」と帝はお思いになって）、「げにただ人にはあらざりけり」とおぼしめして（なるほど普通の人ではなかったのだ、とお分かりあそばして）、

「さらば、御ともには率て行かじ（それでは、ご一緒には連れて行かないことにする）。もとの御かたちとなり給〈ひ〉ね（元の御姿に戻りなさいな）。それを見てだにかへりなむ（それだけ見たら帰りますから）」とおほせらるれば、かぐや姫、例のさまになりぬ（と仰せられると、かぐや姫は普通の姿に戻りました）。

御門、*なをめでたく、おぼしめさるること、せきとめがたし（帝はかぐや姫が変化の者であることを認めても、なお愛しく思いあそばすことを止められません）。 *「なを」は「なほ（問題はあったが、それでも依然として）」だろうが、さて、その＜問題＞とは何か。と言っても、是は明示されている。帝は「げにただう

どにはあらざりけり」とかぐや姫が「へんげのもの」であることを目の当たりにして認めざるを得なくなった。つまり、問題は＜かぐや姫が「へんげのもの」であって、普通の女のような肉欲対象にならない＞ことだ。ただ、此処では新たな問題が提示される。それは、かぐや姫が変化の者であるにも関わらず、帝は依然としてかぐや姫にご執心だというのだ。

かく見せつる宮つこまろ、*よろこび給〈ふ〉（こうしてかぐや姫を引き合わせた美奴丸に帝は叙爵を賜りなさいます）。さて、つかうまつる*百官の人々に、*饗いかめしくつかうまつる（そこで美奴丸は、御狩りに随行してきた多くの役人たちに出世祝いの饗応を盛大に勤め上げ申します）。 *「よろこびたまふ」は敬語遣いなので、主語は帝のようで、となると、この「よろこぶ」は＜嬉しく思う＞のではなく＜礼を言う→謝意を示す→官位を与える＞という具体意を示すのではないか。だが、それは五位の叙爵だろうか。かぐや姫は入内しないのだし、叙爵ならそれなりの儀式を執り行うのではないか。いや、だからその儀式が下文にある饗応なのかもしれない。「つかうまつる」という言い方は自主的に進んで飲食を振る舞うのではなく、決められた様式の儀式を勤め上げるように思える。どうもはっきりしないが、そう解せば一応の理屈が通って読み下せるので、そう取って置く。が、だとしたら、此処に来て是は何故か、いやに世慣れた話しっぷりで、そのくせ変に不親切で分かり難く、何とも違和感というか異相感のある文だ。 *「百官（ひゃくくわん）」は＜もろもろの役人＞と古語辞典にある。 *「饗」は「あるじ」の読みで＜もてなし。饗応。＞とある。

御門、かぐや姫をとどめて、帰り給はむ事をあかずくちをしく、*おほしければ（帝はかぐや姫を残して帰りなさることを物足りなく残念に思いなされたので）、魂もとどめたる心ちしてなむかへらせ給ける（御自分の魂も此処に残して気が抜けた気分でお帰りあそばしました）。 *「おほす」では意味が取れないので、これは「おぼす（思す）」の換字と見做す。

御輿にたてまつりてのちに、かぐや姫に（御輿にお乗りあそばした後に、かぐや姫にこう贈歌なさいます）

（和歌 12）「かへるさの 御行ものうく おほほえて そむきてとまる かぐや姫ゆゑ」

（和歌 12、「全集」流布本版）「*帰るさの御行物憂く思ほえて、背きて止まるかぐや姫ゆゑ」 *古本と流布本は同文。「全集」注に＜「そむきてとまる」が、二重表現になっている。「わたくしの命令にそむいてとどまるかぐや姫ゆえに帰りが物憂い」の意と、「わたくしの命令に従わないかぐや姫ゆえに、帰り道、わたくしは後ろをむいてとまることが多い」の意をかけているのである。＞とある。

（換歌 12）「かぐや姫 背いて止まる 帰り道」

かぐや姫の返し（かぐや姫の返歌はこうあります）

（和歌 13）「むぐらはふ したにも年を へぬる身を なにかは玉の うてなをも見む」

（和歌 13、「全集」流布本版）「*葎延ふ下にも年を経ぬる身を、何かは玉の台をも見む」 *古本と流布本は同文。贈歌で自分をかぐや姫と名指しされたので、返歌では自分を「葎這ふ下にも年を経ぬる身」だと言い返している。「全集」注に＜「むぐら」は路傍に繁茂する蔓草の総称。住居についていう場合は、貧しい家のたとえ。＞とある。「玉の台（たまのうてな）」は＜美しくりっぱな建物。玉楼(ぎょくろう)。ぎょくだい。＞とデジタル大辞泉にある。御所のことを言っている。

（換歌 13）「草深く 玉座に遠い かぐや姫」

これを御門御覧じて、いとどかへり給はむ*そらもなくおぼさる（この返歌を帝はお読みになって、その情緒深さにますますお帰りになる行く先も無いようにお思いになります）。御心は、さらにたちかへるべくもおほされざりけれど（帝はお気持ちでは一向に立ち返りたくは思いなさらなかったが）、さりとて、夜をあかし給〈ふ〉べきにあらねば、帰らせ給〈ひ〉ぬ（そうは言っても、このまま夜を明かしなさることも出来ないので、お帰りあそばしました）。 *「そら」は分かり難い。「いとど」を受けるので抽象名詞には見えるが、どうもピンと来ない。で、連想ゲームで、空模様→風向き→趣き→気分、あたりだと当たり障りが少なそうだ。が、それは次の文に語られるので、「気分」を外形的に言い表して＜宛て→行き先＞とでも言って置く。

つねにつかうまつる人に見給〈ふ〉に、かぐや姫のかたはらによるべくだにあらざりけり（帝は御所にお戻りになり、いつも仕え申している女官にお会いなさると、かぐや姫の横に並べて比べるにも値しません）。「ことひとよりはけうらなり」とおぼしける人の、かれにおぼしあはすれば、人にもあらず（「なかなか美人だ」とお思いだった女も、かぐや姫に比べれば、人並みにも思えません）。かぐや姫のみ御心にかかりて、ただひとり住みし給ふ（かぐや姫のことだけが気になって、ずっと独りで居室なさいます）。*よしなく、かたがたにもわたり給はず（不都合なことに、夜になっても妃の方々の御部屋にもお渡りなさいません）。 *「よしなし」は＜よくない→正しくない

→不都合だ＞。帝が夜に後宮の女の部屋に渡るのは帝の情欲を果たすことではあるが、帝が絶対公人である以上、それは同時に儀式であり、様式化された行動規範であり、即ち義務である。それを正当な理由なく怠るのは政情不安をも引き起こしかねない由々しき事態なのである。

かぐや姫の*御もとに、文かきてかよはせ給ふ（貴族に遇した竹取家のかぐや姫の御許に、帝は手紙を書いて文遣いを通わせなさいます）。御かへり、さすがににくからずきこえかはし給〈ひ〉て（かぐや姫は御返事を、求婚を退けた相手とは言え、体の求めに応じないことを納得した上で尚も御手紙をくださる帝に対してなので、さすがに誠実に申し上げなさって）、おもしろく、木草につけても御うたをよみてつかはす（情趣深く、季節の移ろいに感じ入る思いを木や草に写して御歌を詠んで送ります）。 *「御もと」の「御（おおん）」という敬称は、帝はかぐや姫を妻にはできなかったが、その縁を尊んで竹取家を高家に遇した、ということを示す言い方かと思う。

（第九段）かぐや姫の昇天

かやうにて御心をたがひになぐさめ給ふほどに（このようにして、帝とかぐや姫は御心をたがいに慰めなさりながら）、*三年ありて、*春のはじめより（三年が経った年の初めから）、かぐや姫、月のおも〈し〉ろうゐでたるを見て、つねよりも、物おもひたるさまなり（かぐや姫は月が美しく出ているのを見て、いつになく何か考え事をしている様子なのです）。 *「みとせありて」とは、ずいぶんあっさりと月日が経つものだ。帝の求婚はかぐや姫の出現から少なくも 7 年目のことと見ているので、今はその 3 年後の 10 年目以降での話ということになりそうだ。 *「春のはじめ」と季節が示されるのはこの物語では珍しい。今までと作者が違う、というか、また作者が変わった、との印象を受ける。なお、陰暦でいう春は正月から弥生三月だから、その「初め」は＜年の初め＞だ。

*ある人の、「*月のかほ見ることはいむこと」と制しけれども（側近女房が「月見は体に触ります」と止めたけれども）、ともすれば、ひとりまほにも、月を見ては*いみじく泣き給ふ（時には、独り真顔で月を見ては、しみじみと泣きなさいます）。 *「あるひと」は「在る人」で＜居る人＝側近女房＞。 *月見を楽しむのは夜遊びをすることだから、月見を忌むのは夜更かしを諫める言い方だったようだ。特に女が独りで夜更かしすると、男との性愛に興奮して内分泌が刺激されるということもなく、何も活性しないまま不摂生の負担が掛かる、みたいな子育て崇拝が、電化生活以前の環境では現実的な意味を持っていたのだろう。 *「いみじ」は＜程度が甚だしい＞ことをいう言い方らしいが、かぐや姫は＜大泣き＞したとは思えない。ただ、もののあはれを感じ

て少し涙ぐむ、ということではなく、何か深刻な事柄があってずっと泣いている、ということだろう。

＊文月十五日の月に出でゐて、せちに物おもへるけしきなり（七月十五日の月夜にかぐや姫は縁側に出て座し、深刻に思い悩んでいる様子なのでした）。近くつかはるる人々、竹取の翁のつげていはく（側近女房たちが竹取翁に知らせて言うには）、 ＊「ふづき・ふみづき」は陰暦七月の異称。日本の季節風情に基づく農耕生活感から多くの人に分かり易かった言い方のようで、漢字の当てには漢籍引用もあるものの、発音は和語で和風月名とのこと。ただ、日本の暦のしっかりした概念は中国からの輸入らしいので、固有の古語ではないようで、数字月名の方が古いのかもしれない。それにしても、日付が示される書き方は少し驚くほど此処までの文体と違う印象だ。なお、この部分は「南波校本」では本文として「七月十五日」とあり、校注者が補記した送仮名として＜ふみづきもち＞と読みが示されている。

「かぐや姫、例も月をあはれがり給へども、この頃となりては、ただごとにも侍らざめり（かぐや姫は普段も月見を情趣深くなさっていますが、最近は普通ではございません）。いみじくおぼしなげく事あるべし（ひどく思い詰めていらっしゃることがあるにちがいありません）。よくよく見たてまつらせ給へ（よく事情をお聞き申し上げてください）」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう（というのを聞いて、翁がかぐや姫に言うには）

「なんでう心ちすれば、かく物をおもひたるさまにて、月を見給ふぞ（何を考えて、そんなに物憂げに月を見ていらっしゃるのですか）。＊うましき世に（帝にかくも厚遇を受けている、この満ち足りた生活なのに）」といふ（と言います）。 ＊「うまし」はほぼ現代語の「上手い・美味い・旨い」で＜上首尾だ。都合が良い。立派な仕事だ。美味しい。上手だ。＞などの言い方。「世」は＜世間＞ではなく、竹取翁の叙爵されて出世した＜現状＞をいうのだろう。

かぐや姫のいはく（かぐや姫が言うには）「月見れば、世間心ぼそく、あはれに侍る（月を見ると、世の移ろいがはかなく思われて寂しく、感じ入るのです）。なでう物をかなげき侍るべき（何も殊更に悲しんではおりません）」といふに、かぐや姫のある所にいたりてみれば、なを物おもへるけしきなり（と言うのだが、かぐや姫の居る所に翁が行って実際の姿を見てみると、やはりかぐや姫は物憂げな様子なのでした）。

これをみて（これを見て翁が）、「吾が仏は何事をおもはせ給〈ふ〉ぞ（私の尊い人は何事

をお考えなのか）。おぼすらんこと、なにごとぞ（気掛かりなのは、何なのか）」といへば（と言えば）、

「おもふ事もなし（悩みは特にありません）。物なむ心ぼそくおぼゆる（物悲しいだけです）」といへば、翁（とかぐや姫が言うので、翁は）、「月な見給〈ひ〉そ（月を見なさるな）。これを見給へば、物おぼすけしきはあるぞ（月を見ていらっしゃると、あなたは物憂げそうに見えます）」といへば（と言えば）、

「いかでか月を見ではあらむ（どうしても月を見ないではいられません）」とて、なを、月出づれば、出ゐつつなげきおもへり（と言ってかぐや姫は、また月が出ると、縁側に出て座しては悩み嘆いていました）。夕やみには、物おもはぬけしきなり（月が出ない日の夕闇には、嘆いていない様子です）。月のほどになりぬれば、なをときどきは、うちなげきなどす（月夜の頃になると、やはり時々は、嘆いています）。

これをつかふ者ども「なを物お〈ぼ〉す事あるべし」とささやけど（このかぐや姫の様子に、仕える女房たちは「やはり悩み事があるに違いない」とささやき合っていたが）、親をはじめて何事ともしらず（親を初め誰もその理由は知りません）。

八月十五日*ばかりの、月に出〈で〉ゐて、かぐや姫、いといたくなき給ふ（八月十五日が近づいた月夜に、かぐや姫は縁側へ出て座して、とても痛々しく泣きなさいます）。人めもいまはつつまず泣きまふ（人目も今は憚らず泣きなさる）。これを見て、親ども、「なに事ぞ」と問ひ騒はぐ（これを見て養父母は「何があったのだ」と問い立てます）、 *「ばかり」はおよその程度や範囲をいう副詞で、日付についてであれば＜頃＞という言い方になりそうだが、後文に「八月十五日」こそが重要な予定日と示されるので、此処での「ばかり」は＜近づく日＞を指している。が、八月十五日は中秋の満月で正にお月見の月。象徴的な日付というより、この日以上に説得力のある日は無い、と私のような者でも思い付く分かり易さではある。その上で、何かまたオチを用意しているなら、それはそれで楽しみだ。要するに、八月十五日は如何にも大イベントがあるに相応しい日付なのだから、それならいっそ此処では何日前と言っても良さそうなものを、そこはボカしてある。

かぐや姫*泣く泣くいふ（かぐや姫は泣き泣き言います）。 *「泣く泣く」は＜泣きながら＞という副

詞語用。「泣く」はカ行四段活用自動詞の「泣く」の終止形なので外形表現。「泣いている、また泣いている」で＜「泣いている」状態が続いている＞ことを示し、その上で別の動作「言ふ」があるので、その泣いている状態が＜泣きながら＞という言い方になる。古文に於ける事象説明の地語りはこういう表現になるようだ。が、現代文での＜泣きながら＞は、その現場の臨場性または自己姿勢を示す言い方としては、連用形重複の「泣き泣き（泣いて泣いて）」という言い方になる。しかし、現代文でも、現場を離れた事象報告では「（誰かが）泣く泣く（そうしていた）」という表現は使われるし、敢えて自己の内心を客体視して「（自分の心境としては）泣く泣く（そうした）」という言い方もする。

「さきざきも、申さむとおもひしかども（前々から申し上げようと思っていましたが）、『かならず心まどはし給はん物ぞ』とおもひて、いままで過ごし侍りつるなり（『申し上げれば、必ず父母さまの心を惑わし申すに違いない』と思って、今まで言わずに来ておりました）。

『さのみやは』とて、うちいで侍〈り〉ぬるぞ（『でも刻限が迫っているので、いつまでもそのようにお話し申さないままでは済まない』と思いますので、今から泣いている理由を、打ち明け申し上げます）。

己が身は、*この国の人にもあらず（私はこの国の生き物ではありません）。月の都人なり（月の国の貴族なのです）。 *「この国」と此処で言う時の「国」の概念はどういう内実なのか。仮にこれを「日本国」という国家概念だとしても、この物語成立時での「日本国」の領域はどれほどのものだったのか。江戸時代末期か明治期に蝦夷地がアイヌ民族への武力攻勢で日本国に組み込まれた変遷を見れば、此処で言う「国」は国際機関による承認に基づく客観認識としてではなく、当時の主観認識に於いて＜ある人物に統合管理されている一定範囲内の人間集団＞であって、その「ある人物」が「御門」ということなのだろう。なお、この時の「人間」とは＜他の獣類とは違って言語概念で社会構築する動物＞の意味で、言葉が通じているかぐや姫は霊的属性があるにせよこの「人間」に含まれるので、「この国」の人たちから見れば「人」と見做せる、ということになるのだろう。それに、その時点での直接的な関係がある外国は、中国（唐など）や高麗あたりがせいぜいで、その背後や周辺に他国の存在は知識しても交易実体は少なく、であれば「外国人」の認識も外見上は＜差異の少ない人たち＞だったかもしれない。が、かぐや姫が此処で言う「この国の人」がそういう意味なのかどうかは分からない。少なくも、違う可能性はある。で、その可能性を示すために、このかぐや姫の「この国の人にもあらず」は「人にもあらず」を＜（あなたが方が思うような）生き物ではない＞と言ったもの、と取って置く。また、「この国の人」の「世界観」が上記のようなものだとすれば、その「世界概念」は今日から見れば非常に狭く、現在のものとは相当違うだろう。まして、彼らに「地球」という概念認識は無かったろうし、生活実感としては現代に生きる私でも宇宙飛行士ではないのでその認識は無いが、次の文に「月のみやこびとなり」とあっても、その「月」の認識は「地球」に対して衛星状態にある天体などというものではないはずだ。となると、この

「みやこびと」は「人類」またはそういう概念で語用する「人間」に対する「異星人」というものでもなく、むしろ「月」は視認できるだけに、「この国の人」にとって船で外国へ渡航したことがある人以外の人であれば、逆に身近な「他国の人」だったのかもしれない。そのうえ、「みやこ（宮処）」という概念が通じる社会構造が「月の国」にもあるとすれば、共通の身分制度や価値観があるやにも聞こえる。しかし後の展開を見ると、そういう期待は無効のようなので、それはそれでこのかぐや姫の発言意図に対する私の理解は混乱するが、他に此処でかぐや姫が「みやこ」を持ち出す意味が私には分からないので、此処ではその期待を抱かせる言い方と読んで、この「みやこびと」を＜貴族の子女＞として置く。また、後の展開を読み進む前提として「この国の人」の立場を見直して置きたいが、1969 年にアポロ 11 号で初めて月との往復を果たした人類であってみれば、この「今は昔」に「この国」と自由に往来していた「月の都人」は、進んだ技術文明がある「国の人」なのではなく、人間業を越えた「超人たち」に見えた、かと思う。となると、そうした理解を超えた事物の存在に対しては、何が有効か、何が正解か、どんな意味か、は知りようがない。だから、「この国の人」は今までの知見に基づく外交方法として、最大限の歓迎や攻撃を試みて対処する他は無い、ということか。月の住人は、夜空に月は見えるのだから、確かに彼処に居るように思えるが、地上人は空を飛べないので、行き来が出来る月の国の人は自分たちとは別の生き物だ、と「この国の人」は考えたようだ。このように、現代とは相当に違う世界観の下で語り継がれたであろうこの物語の、その世界観を推理しながら文意を探る作業は、なかなかに手強いが、よく分からない相手だから物理的に制圧しないと安心できない、という好戦的な恐怖心は生命体に備わった基本機能かもしれない。

＊それをなむ、＊むかしのちぎりありけるによりてなむ（それをわざわざ、前世の因縁があったために）、この＊世界にはまうできたりける（この国に参り来たのです）。 ＊「それをなむ」の「なむ」は、「それを（月の都人であるところを）」と言って一呼吸置いたというよりは、かなり押し付けがましい語感で＜その優れた月の都人がわざわざこんな劣ったこの国に来たのには＞と高飛車に見下した姿勢を示しているように見える。そのかぐや姫の優越認識をどこまで明示できるのかは判断が着き難いが、単に＜遠路はるばる＞と勿体を付けるだけでも＜わざわざ＞は補語できそうだ。 ＊「むかしのちぎり」は「全集」注に＜前世の宿縁。仏教思想。前世でしたことによって、現世のあり方が決定され、現世のあり方によって、後世のそれが決まるという、三世因果の思想。＞とある。仏教思想は宇宙の原理を説くので、月の住人も仏教原理には従う、ということか。しかし、作り話で原理を説かれても、話だけなら何とでも言えるので説得力は無い。が、現にこういう書き方がなされているのだから、そういう作文構想であるらしいとは承知して置く。にしても、その前世の出来事が示されていないので、仏法に基づく説話らしいと心構えしたところで、何一つと得心できない。いきなり分かり難い文になってきた。 ＊「世界」も仏典から来た用語とのことで、その心算で文意を得ようとしてみたが、仏語では「世界」は＜宇宙＞を言うらしく、となると、月も宇宙の中にあるので「この世界に参で来」という言い方は成立せず、やはり此処では「この世界＝この国」と取って置く。なお、「詣で来」は謙譲表現ともあるが、「それをなむ」と言い出した姿勢からしても、また帝への尊大な態度からしても、かぐや姫は「この国」に敬意は無く、養父母に対して丁寧語を使っていると読んで置く。

いまは、かへるべきほどになりにければ（遂に、帰らなければならない刻限となりましたので）、十五日にかのもとの国より、むかへに人々まうで来むとす（この十五日に元居た月の国から、私を迎えに人々が遣って参ります）。

*さらにまかりぬべければ、おぼしなげかむがかなしき事を、この春よりおもひなげき侍るなり（そうなると、立ち去ることになりますので、父母君がお嘆きなさろうことがつらいと、この年初から思い嘆いております）」といひて、いみじくなくを、翁（と言って、ひどく泣くのを、翁は）、

*「さらに」は＜その上に＞と副詞語用されることが多いが、此処では「さあるに」の略で接続詞語用されている、と取って置く。

「こは*なでうことのたまふぞ（これはまた、何ちゅうことを言いなさるのか）。竹の中より見つけきたりしかど、菜種のおほきさおはせしを（あなたを竹の中で見つけたときは、ナタネの大きさでいらっしゃったのを）、わが丈立ち並ぶまで、やしなひたてまつりたるわが子を（私と同じ大きさになるまで養い申し上げたという愛しい我が子を）、なに人か、*むへにこむ（誰が迎えに来るというのか）。まさにゆるさむや（そんな無謀を、どうして許せようか）」といひて（と言って）、「*われこそ死なめ」とて、*泣きののること、いとたへがたけなり（「そんなことになったら、私が死んでしまいたい」と泣き叫んで、とても辛そうです）。 *「なでうこと」は撥音無表記で「なんでふこと」と読むらしい。「なじょうこと」や「なじゅうこと」と発音しても意味は通じそうな気もするが、此処では「ナンチュウコト！」と絶叫した、と読むと楽しい。 *「むへにこむ」は不明文。この部分は「全集」文に＜迎へ聞こえむ（迎え申し上げよう）＞とある。何とも判断に困るが、一応これは「迎へに来む」の誤写と読んで置く。 *「われこそ死なめ」は「こそ」を使わない文型だと「われ死なむぞ」で、この時の「む」は（願望）意志だ。 *「泣きののる」は「泣きののしる」の誤写と見做す。

かぐや姫のいはく（かぐや姫の言うには）、「月の*都の人にて、父母あり（私は月の貴族の者なので地位のある実の父母があって）、*かたときのあひだとて（実父母には、私は他の国に行かなければならない定めの運命だが、それもわずかな間だけのことだと言って、そのように期間を決めて）、かの国より、まうで来しかども（向こうの国から遣って参りましたが）、*かくこの国には、あまたの年を経ぬるになむありける（それがこの国では、このように多くの年を経

ることになってしまったものなのです）。 *「みやこのひとにてちちははあり」は条件項として「かたときのあひだ」の説明を成す構文と見做す。にしても、此処でも「みやこのひと」とあることには「みやこ」を特に言う作者の意図を思わずにはいられない。と言っても、その意図は私に十分汲めるものでは無いが、せめてその＜貴族属性＞だけは指摘して置く。 *「かたときのあひだ」は「全集」注に＜人間世界の「あまたの年」が、天上界の「かた時」にあたるのである。浦島説話を想起させる。＞とある。私も、大体そのような文意構成を作者は意図したのだろうとは思うが、「人間世界」や「天上界」という語はその概念規定を無検討に使えない非日常語なので、今は同意を留保する。むしろ私は、このかぐや姫の弁から事実経過を拾って、それらから作者の構想概念を推察する、という姿勢を取ってみたい。で、この「かたときのあひだとて」の「とて」はかぐや姫が実父母にした説明または説得で、その説明が必要だったのは「むかしのちぎりありける」事情によるものと見做す。 *「かくこの国には数多の年をへぬる」は、当初は「かたときのあひだ」のつもりだったが＜居心地が良いので長居してしまった＞ということではなく、はじめから期間は決まっていて「いまはかへるべきほどになり」ているのだから＜月の国の「かたとき」がこの国では「あまたのとしをへぬるになむありける」＞という文脈文意だ。いやだから、作者はこの文意を以て＜月の国での時間の流れとこの国での時間の流れは違う＞ということを読者に示している、と見るべきではないのか。つまり、この物語は、少なくもこの部分においては、仏法説話になっていて、それは経典の有難さを教える講話ではなく、仏門に於いてはこのような思考実験を行うものだという諭えとしての説法だ。それが、常識に捉われるな、既成概念に縛られるな、という学究姿勢を訴えているなら、その指摘は、今に生きる昔話として、傾注に値するかもしれない。

かの国の、父母の事*おぼえず（この国にあっては、私はかの国の父母を懐かしく思い出すことなく）、ここには、かく久しく*あそびならひたてまつれり（あなた方には、このように長い間の旅行期間を親しくさせていただきました）。*いみじからむ心ちもせず、かなしくのみある（ですから、月へ帰ることが、嬉しいという気持もせず、悲しいだけです）。されど、をのが心ならず、まかりなむ*とする（けれど、心ならずも、立ち去ることになります）」といひて、もろともにいみじう泣く（と言って、翁と一緒に大泣きします）。 *「おぼゆ」は＜思い出す＞だが、此処の「おぼえず」は＜思い出さない←忘れた＞ではない。上文で「父母あり」と言っていて、その存在認識はあるのだから、この「おぼえず」は＜懐かしく思い出すことはない＞という言い方なのだろう。が、だとしたら随分冷たい物言いに聞こえるが、それはかぐや姫の冷淡な性格に依るものではなく、世界が異相なのでそういう心の働きになる、みたいな説明が後述されるが、いくら作り話でも、それは都合の良い切り貼り説明の説得力が無い論理で、此処のこういう言い方も思考実験にしてはお粗末で、チープなお涙路線の印象を受ける。 *「あそぶ」は古語辞典に＜奈良時代では、戸外または山野で遊楽・遊宴をする意。＞とあるので、月の国から見て外国に＜旅行する＞という言い方と取って置く。 *「いみじ」は程度の甚だしいことをいう形容詞だが、此処には目的格が示されていない。が、下に是を打ち消して、「かなしくのみあ

る」とあるので、省かれた目的語は「かなし」の対語である「うれし」と分かる。となると、省かれた条件項は＜月へ帰ることになっても＞なのだろう。　*「とする」の「する」は「為（す、ある行為が為される→そういう予定になっている）」の連体形で下に＜ものなり＞が省かれた言い方、かと思う。「とす」と言い切れば＜～となされます＞と省語の無い言い方で、意味はどちらでも同じように見えるが、「とする」のほうが丁寧表現だろうか。

つかはるる人々も、年頃ならひて（仕えている女房たちもかぐや姫に長年親しんで）、立ち別れん事を、心ばへなど、あてやかに、うつくしかりつる事を見ならひて、恋からむことのたへがたく（立ち別れになることを、姫の気立てが上品で、可愛らしかったことを懐かしんで、寂しくてたまらず）、湯水も飲まれず、おなじ心に、なげかしかりけり（水さえ喉を通らないほどに日常と掛け離れた事態との驚きを持って、養父母と同じ気持で悲しんでいました）。

このことを、御門きこしめして、竹取が家に、御使つか〈はせ〉給〈ふ〉（このことを帝はお聞きあそばされて、竹取家に御使者を遣わせなさいます）。御使に竹取出で合ひて、泣く事かぎりなし（御使者には翁が出て応対し、泣くことが止まりません）。この事を嘆くに、髭も白く、腰もかがまり、目もただれにけり（かぐや姫との別れを嘆いて、翁は髪も白くなり、腰も曲がり、目も張りを失くしました）。

*翁、今年五十ばかりなりけれども（翁は五十歳程だったが）、物おもふには、片時になむ、老になりにけると見ゆ（心労のため、瞬時に老いてしまったように見えます）。　*「翁今年五十ばかりなりけり」は問題箇所である。竹取翁は、多くの熱心な求婚者に全く応じないかぐや姫に、子を設けて一門の繁栄を図るために結婚するようにと説得した際に、「翁とし七十にあまりぬ」と発言して急かせたのである。その説得を受けて、かぐや姫は難題提示をしたのだから、それは少なくも七年前のことだったはずだ。で、その時点では翁がかぐや姫を連れ帰った時から何年も経っていたようには読めないので、実際に竹の採取を行っていたにしては＜七十歳＞は高齢に過ぎるとの感想を持ったが、七年前で七十歳だったのなら、今は七十七歳ということになり、いっそう疑わしい。と言って、「とし七十にあまりぬ」を＜人の寿命は七十歳を超えないので＞とも読めないようで、だから問題箇所なんだろうが、此処の「五十ばかり」は「七十にあまりぬ」よりはずっと妥当性がある、とは言えそうだ。

御使おほせ事とて、翁にいはく（御使者が帝の仰せ言として翁に言うには）、「いと心くるしく、物おもふなるは、まことにか（かぐや姫が月に帰ると言い出して、おまえがとても困って、思

い悩んでいるというのは、本当のことなのか）」とおほせ給ふ（と仰せになります）。竹取、泣く泣く申〈す〉（竹取の翁は泣く泣く申し上げます）、

「この十五日になむ、月の都より、かくや姫の迎へに、まうで来なり（この十五日に、月の国の都から、かぐや姫を迎えに遣って参ります）。たうとく問はせ給ふ（よくぞ本日、有難くも御使者を賜り、畏くもお尋ねくださいました）。この十五日には、人々給〈ひ〉て、月の都人、まうで来ば、とらへさせむ（この十五日には、お上の兵士を遣わせ賜って、月の都人が遣って参ったなら、捕らえさせましょう）」と申〈す〉（と申します）。

御使かへりまゐりて、翁のありさま申〈し〉て、奏しつる事ども申〈す〉を、きこしめしてのたまふ（御使者が御所へ帰り参って、翁の様子を報告し、奏上した言葉を伝え申すのをお聞きあそばして、帝は仰います）。一目見給〈ひ〉し御心にだにわすれ給はねば（帝ご自身が一目ご覧になっただけでお忘れにならないのだから）、「あけくれ見なれたるかぐや姫を*やりて、いかがおもふべき（翁は毎日見慣れたかぐや姫を月へ行かせては、どれほど悲しむのだろうか）」 *「やる（遣る）」は＜行かせる。遣わす。逃がす。＞などと古語辞典にある。接続助詞「て」は＜その場面に於いて＞という条件提示項を成すので、この文型は下にその条件下での予測事態を述べる仮定構文の語法なのだろう。「いかが」は疑問副詞。「べし」は可能推量意。

かの十五日に*司々におほせて（斯く言う、その十五日に向けて、帝は武器や武具や厩舎や兵糧の各担当官に戦闘準備を御命じになり）、*勅使少将・高野大国といふ人をさして（帝の全権代理の近衛少将のタカノノオオクニという人を指揮官と任命して）、近衛の司、*合はせて、二千人の人を、竹取が家に遣はす（当日は近衛府の衛士の左右合わせた二千人の兵士を竹取邸に派遣します）。 *「つかさつかさ」は各役所の担当官に戦闘準備を命じたという文意だろう。戦争は兵士だけでは動かない。武器や兵糧の準備を整えなければ始まらない。 *「チョクシ」は＜帝の代行者＝任務遂行に於ける全権代理＞。 *「あはせて」は近衛府は左右の二府の分担で万全を期す体制だったらしい。優位性は左府にあったようだ。

家にまかりて、築地の上に千人、屋の上に千人（オオクニは家に着任すると、外塀の上に

千人、屋根の上に千人と）、家の人々、いと多かりけるにあはせて、あける暇もなく守らす（家人がとても多く居た側に付かせて、隙間無く守らせます）。この守る人々も、弓矢を帯してをり（竹取邸の家人も弓矢を備えていて）、屋の内には、女どもを、番において守らす（室内では女たちを役目ごとに固まらせて、男を各当番に決めて守らせます）。

女、塗籠の内に、かぐや姫を抱かへて居り（養母は母屋の中の土塀で囲まれた塗籠倉庫の中で、かぐや姫を抱いて潜んでいます）、翁も塗籠の戸をさして、戸口に居り（養父も塗籠の戸を施錠して、戸口に居ました）。

翁のいはく（その養父の翁の言うことに）、「かばかりして守る*所に、*天の人にも負けむや（是ほど堅く守っている以上は、月の都人の他に、空を飛ぶ人型の物の怪にも負けることはないだろう）」といひて、屋の上にをる人々にいはく（と言って、屋根の上に居る兵士たちにこう言います）、「露の物も空に翔らば、ふと射むしたくし給へ（露ほどの小さな物でさえ空を飛んでいたら、即座に射殺すようにしてください）」 *「ところに」の「ところ」は＜場所＞ではなく＜場合＞なのだろう。こういう語用は現代語にも普通にある。 *「てんのひと」は「月の都人」のことだろうか。しかし、この臨戦態勢は正にその「月の都人」に対して敷かれているのだから、他の比較対象を例示する係助詞「にも」を使うのは的が外れている。焦点を合わすなら「（天の人）には」と言うべきだ。尤も、御所の衛府は基本的に地上戦に備えているので、その意味ではこの軍備は＜月からの敵に対しても（対抗し得る）＞という言い方は成立するが、この文での条件項には「かばかり」とあって、衛府の軍事能力の一般水準ではなく、今回の態勢・作戦に於ける軍隊評価だから、やはりこの「にも」は＜月の都人以外にも＞という語用と見るべきだ。となると、この「天の人」は何者か。古今東西、およそ人類の共通認識として、天変地異は人が抗し得ない人智を超えた＜神の技＞である。そして、ヒトには出来ないが、ヒトは空を飛ぶ生き物が多くいることは知っている。だから天変は空を飛べる超人かそれに類する何者かの仕業のようにも思える。ということは、その超人は神である。空を飛べても「月の都人」は視認できる月に＜定住する異国人＞なので神ではない。そんな風に考えれば、この「天の人」は、全く人智の及ばない＜絶対神＞では歯が立たないが、いくらかの霊力がある程度の物の怪の類であれば＜月の都人以外にも、月の都人と同様に御し得る＞と期待できるので、そうした＜空を飛ぶ物の怪＞ということになりそうだ。大気圏で空を飛ぶ空気抵抗を利用した飛行と、大気圏外に地球引力を振り切る推進力を持って飛び出すのとは異相であり、その事一つを取って見ても、此処で言う＜空を飛ぶ＞はあよそ具体性の無い、非常に面倒な定義だが、そういう難しい語をこの物語は、ある意味では素朴で素直な、またある意味では拙く罪深い認識のままに、安直に使っていると見て置くべきだろう。

守る人々のいはく（兵士たちが言うには）、「かばかりして守る所に、*かばり一だにあらば、まづ射殺してむ（コウバカリして守っているのだから、敵のコウベ一つでも見えたら、すぐに射殺して）、矛にささげけむとおもひ侍〈り〉（槍に吊り下げようと思っております）」といふ（と言います）。翁、これを聞きて、たのもしがり居り（翁は是を聞いて頼もしく思っていました）。 *「かばり一だに」は難箇所らしい。「かばり」は名詞だろうが、何を示すのか不明だ。それに加えて、この部分は異文が多くて、解釈が定まらないらしい。ただ、この軽口は前フリに、翁が言った「かばかりしてまもるところに」を復唱しているので、「かばかり」に近い発音の名詞が来ないと洒落にならない。ということは、この文は内実よりも言い回しこそが肝心だというのに、異文を多くして写本されるというのは如何にも不可解だ。「全集」注には＜底本（古活字十行甲本、とのこと）はじめ諸本の多くは「かはり」。武藤本・島原本などの「はり」に従う説もあるが「針」を「射殺して、外にさらす」というのはおかしい。やはり田中大秀のいうように、「かはり」を「かはほり（こうもり）」の誤写とすべきだろう。「こうもり（蝙蝠）」ならば、夕暮れに姿をあらわして空を飛ぶので、ここにふさわしい。＞とある。が、この「誤写」説も、この文の軽口属性を思うと少なからず疑問が残るものの、同時に「かはほり」なら「かばかり」の洒落に（音よりは字面でだが）なり得るし、文意の通りも良いので相当に引かれて乗り換えたくなる。が、当本文のサゲは「外にさらさむ」ではなく「ほこにささげむ」なので、蝙蝠を槍に吊り下げるのも戦利品誇示の図柄としては悪くないが、このサゲが最も生きる対象は「かぶり（冠・頭・首）」であり、この「かばりひとつだに」は＜「かぶりひとつだに」＝敵の首が一つでも見えたら＞のダジャレを言った心算なのだが、それが分かり難い下手な洒落だったので誤写が続いた、というのはコジツケが過ぎるか。マ、定説が無いなら、是も一説の内だ。

これを聞て、かぐや姫は（これを聞いて、かぐや姫は）、「さしこめて、守り戦かふべき仕度をしたりとも（私を倉庫に隠し施錠して守り、敵の侵入を武力で防ぐ支度をしていても）、あの国の人には、みな開きなむず（あの国の人に対しては、施錠した門は、みな開いてしまうでしょう）。あひ*戦かはむ人もあらじ（その侵入に抵抗することも出来ないでしょう）」 *「たたかふ」は＜戦闘する＞でもあるが、此処では上文を受ける文意からして＜（侵入を）防ぐ＞だろうし、「敢ふ（持ち堪える）」の語意を合わせれば＜抵抗する＞だ。確かに、この戦争は「この国」にとっては初めから防衛戦と位置づけられているようだが、「月の都人」は単に期間留学の子女を迎えに来るだけのようで、友好的な交渉を持つ可能性や意義の検討が無いのは、かぐや姫を失うことが受け入れられないという頑なな姿勢によるもので、私から見れば子孫繁栄に資さない女にどういう象徴性があるのか理解出来ないが、これが非現実的かというと、私のような呑気な感想は本当の困難に直面したことが無い狭い多様性認識なのかも知れず、このような価値観の違いで殺し合う戦争は現在でもあるようで、この事態をどう見るかは、思考実験としては複雑でなかなか興味深い。尤も、これはかなり難しい前提に基づく仮

想設定のようなので、どれほど実際の外交交渉に役立つのかは疑問だが。

翁のいふやう（翁が言うには）、「迎へに来む人をば、*長き爪して、まなこをつかみつぶさむ（迎えにくる人は、長い爪で眼を掴み潰してやる）、*さか髪をとりて、かなぐり落とさむ（鬼の逆髪を掴んで、地面に叩きつけてやる）。*さが尻をとりて、ここらのおほやけ人に見せて、恥を見せむ（そいつの尻のフンドシを取って、多くの近衛兵に見せて、恥を掻かせてやる）」と、はらだち居る（と腹を立てています）。 *「長き爪」は何かの武器を例えているのか。単に攻撃性を鼓舞するための乱暴な言い回しなのか。まるで鬼退治をするかのような威勢の良さだが、実際に自分の爪で誰かの目を握り潰すとなると、相当に気味悪そうだ。どうも現実味が薄くて、漫画風な演出にしか見えないが、何か象徴的な意味でもあるのだろうか。意図が掴めない。それに、残虐性というか攻撃効果みたいなものが、例示を下るほどに和らいでくるのも、漫才によくある烏滸な言い方に聞こえる。ただ笑って読めば良いのだろうか。 *「さか髪」は髪を逆立てて怒り狂った鬼の形相だろうか。いっそ面白がって、そう言い切ってしまおう。 *「さが尻」は「全集」訳に倣って＜そいつの尻＞と言って置く。

かぐや姫いはく（かぐや姫が言うには）、「声高かに、なのたまひそ（そんな腹立ち紛れの雑言を、大声で仰いますな）。屋の上に居る、人どもの聞くにいと*まさなし（お気持ちは有難いが、そんな乱暴な物言いは、屋根の上に居る人たちに聞こえると、笑われるので、とても困ります）。 *「まさなし」は「正無し」で＜よくない。不都合だ。＞などと古語辞典にある。現代語に無い言い方なので、掴みにくい語感だが、下文との繋がりで文意を汲めば＜翁が「腹立ち居る」＝かぐや姫が「いますがりつる心ざしどもを思ひも知らず」＞という式を成立させる因数が「まさなし」と形容される目的語だから、それを明示すれば自ずと「まさなし」の言い方は導かれるのだろう。と、勿体つけたが、それは即ち＜竹取夫婦のかぐや姫への愛情の深さ＞であり、それがために翁は体面も構わず雑言を吐き、その事でかぐや姫は改めて竹取夫婦の真心を知った、という場面なのだろう。

*いますがりつる心ざしどもを、思ひも知らで（でも、このように体面もなく絶叫なさるほどに注いで頂いていた愛情の深さとは、思いも知らずに）、まかりなむずる事の、口惜しう侍りけり（立ち去ることになるのは残念です）。*長き契りのなかりければ、ほどなく、まかりぬべきなめりとおもふがかなしく侍〈る〉なり（これ以上長く此処に留まる運命ではないので、間も無く、立ち去らなければならないと思うと悲しゅうございます）。 *「いますがり」は＜「在り」「居り」の尊敬語。い

らっしゃる。おいでになる。＞と古語辞典にある。「在る」は＜存在する＞でもあるが＜状態になっている＞でもあり、現代語では状態動詞の敬語形はなく、受動形にして＜頂く＞を付ける。「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形。「心ざしども」は＜養父母の愛情の深さ＞。養母に抱かれながら、養父の絶叫を聞いたかぐや姫が、養父母を慰めるために言った言葉、なのだろう。今日でお別れだが、今になって養父母の愛情の深さを改めて知った、という感動シーン、だろうか。　*「長き契り」は＜これ以上長く共に暮らす運命＞。

親たちの*顧みを、いささかだにつかうまつらで、まからむ*みちも、やすくもあるまじきに（親たちへのご恩返しを、いささかも奉仕申さずに、去り行くのは道理に外れますので）、*日頃もいかでゐて、今年ばかりの暇を申〈し〉つれど（年初からずっと、どうか此処に留まれるように、今年いっぱいの猶予を月の都人に願い申してきましたが）、さらに、許されぬよりてなむ、かくおもひなげき侍る（更新延長は許されなかったので、こうして悲しんでおります）。御心をのみまどはし侍〈り〉て、まかりなむことのかなしさ、たへがたく侍〈る〉なり（御父母さまの御心を悩ませ申し放しで、立ち去ることの未練は、この上無い物でございます）。　*「かへりみ」は＜後ろを振り返って見ること。事情を見直すこと。反省。世話すること。＞などと古語辞典にある。「親をかへりみる」は＜親の世話を見る＞という言い方らしい。「かへる」は多くのことを表す語のようだが、原義に＜その事物の性向属性による本来の姿に戻る＞という概念があるように、私には見える。で、「受恩」には「報恩」するのが本来の姿だという倫理観が共有されている社会に於いて、愛育してくれた親に対して奉仕するのが本来の性向属性だという考え方は、そうした行動規範が世代交代の円滑化による平穏な秩序維持に資すると期待されて、それが可能な環境下なら一定の支持はされるのだろう。尤も、親の愛は＜無償の愛だから尊い＞という、「報恩」とは別の世代交代に資する価値観も一方では強力に支持されるのも普通で、それらは必ずしも矛盾する対立概念ではないが、規範を説明する際の考え方のようなもので、社会運営の基本原理と言えるようなものではなさそうだ。　*「みちやすし」は＜道理に適う＞という言い方なのだろう。「やすし」は＜容易だ＞だが＜無理が無い＝理に適う＞でもある。尤も、この道理は＜「この国」に於いての有効性＞であるらしく、月の国ではこの訴えは却下されるようだ。　*「ひごろも」は「申しつれ」に掛かる副詞と読む。また、「いかで居て」は＜何とか（この国に）留まって＞と読んで置く。が、「全集」文にはこの部分は「日頃も出で居て」とあり、「日頃も」は「出で居て」に掛かるとしてある。文型・文意ともに「全集」文の方が通りは良いように見えるが、此処では当本文を真じて置く。

かの都人は、いと*けうらにおはせず、おもふことなく、めでたく侍〈る〉なり（向こうの都人はおよそ、他事に頓着せず、私が訴え申す親への恩などを思い悩むことなく、陽気にしているので

す）。さる所へ、まからむずる事、*いみじくもおぼえず（そういう所へ行き去りますことは、何も嬉しくありません）、老ひ衰へ給へる御さまを、見たてまつらざらむこそ、恋しからめ（私は、老い衰えていらっしゃる御父母さまを、お世話申せないのが、心残りなのですから）」と言ひてなく（と言って泣きます）。 *「けうらにおはせず」の主語は「かの都人」で、述語はその属性説明らしい。で、この時点でのかぐや姫の立場は「この国の来客」であることから、養父母を敬して、月の都人を謙る、という言葉遣いとなっているようで、「けうら（きょうら＝きよら）」が褒め言葉だとして、それを「ず」と打消す言い方は分かり易い。であるなら、「おはす」は「御座す（いらっしゃる）」という敬語遣いでは有り得ず、「おふ（負ふ；帯びる、追ふ；後から来る）」の未然形「おは」＋使役の助動詞「す」が付いた言い方と見做す他は無い。と、この「けうらにおはす」という言い方が上文を受ける文意であるなら、かぐや姫が今言った＜親の恩に報いて奉仕する＞という道理を＜共有して追認する＞という意味に、この言い方が成り得るかどうかが問題となる。と、「きよら」は形態形容を示す形容動詞およびその名詞形だが、その形容概念を示す「きよし」という形容詞は＜けがれがない。きれいである。曇っていない。＞などの他に＜残るところがない＞という語用が古語辞典にある。と、この「けうらに」を＜全うするように←問題を残さないように＞、「おはす」を＜追わせる→決着させる＞と解し、この文が月の都人の属性叙述であることから、「けうらにおはす」を＜完全主義者＞という言い方にコジツケることを思い付いた。そして、この完全主義者というものは、物に執着して達観できない者であり、仏教で言う世俗人を示すようにも思える。そして此処の文は、この国に馴染んだかぐや姫は執着心に捉われて養父母との別れを嘆き悲しんでいる、という様相を此処に示している、ような書き方にも思えて来る。此処の部分は、「全集」文などには「けうらに、老いをせずなむ」とあるようで、この異文は文意を全く変えてしまうし、その文意の違いは文脈全体にまで影響するように思える。私の解釈の強引さは承知の上だが、「全集」の＜月の都の人は、たいへんすばらしく、年をとらない＞という解釈も、仮にそれが月の都人の真の属性だとしても、それを此処で言う妥当性には少なからず疑義があり、とりあえずこの線で押して置く。 *「いみじ」は前にもあったが＜とても嬉しい＞と解して置く。

翁いはく（翁が言うには）、「胸いたき事なの給ひそ（今さら弱気にさせるような、胸が痛む感傷的なことを言いなさるな）。*など*うるはしき姿ある使にも*さはらじ（どうしてこの堅固な守りが、優れた装備の迎えの使者が来ようと、その侵入を防げないことがあろうか）」とねたみ居り（と、月の都人を憎々しく思っていました）。 *「など」は＜「なにと」の約＞と古語辞典にある。「何と」は＜何を以て～なのか＞という言い方のようで、「など」は反語や疑問の＜なぜ、どうして、どのように＞という副詞語用をするらしい。「などか」とほぼ同じように見える。 *「うるはし」は敬意のある美形容で＜秀でて美しい。立派だ。優れている。＞あたり。 *「障る」は＜支障がある。問題がある。＞で、目的格は「うるはしきすがたあるつかひ」だ

から、この「さはり」は＜月の使者（の侵入）に支障がある＝使者の侵入を防ぐ＞ということだろう。翁は直前の弁で、戦意を露にしていたのであり、かぐや姫はそれを鎮めようとしたが、翁は「胸いたき事な宣ひそ」とほとんど聞く耳を持たぬの態だ。だから戦意は収まらずに、翁は今なお「ねたみ居り」ているので、彼が懸念するのはこの国の＜軍備＞だ。

かかるほどに、宵うちすぎて、光りたり（そうしている内に、夜中を過ぎると、光りました）。もち月のあかさ、十あはせたるばかりにて、ある人の、毛の穴さへ、見ゆるほどなり（満月の明るさの十倍もある光で、其処に居た人の毛の穴させ見えるほどでした）。大空より、人、雲にのりて下りきて、土より五尺ばかり、上りたるほどに、立ちつらねたり（大空から人が雲に乗って下りてきて、地面から 150cm くらい浮いて、高床寝殿の縁側と同じ高さに、立ち並びました）。

これを見て、うちなる人の心ども、物におそはるるやうにて、あひたたかはむ心もなかりけり（この月光に浮かび上がる使者たちの超然とした姿を見て、邸内の人々は物の怪に襲われるような気がして戦意を喪失しました）。からうして、おもひおこして、弓矢をとりてむや、とすれども（何とか奮起して弓矢を取って戦おうとするが）、手に力もなくなりて、なへかかりたり（手に力が入らずにへたり込んでしまうのでした）。

中に心さはがしき物、念じて射むとすれば（中には剛毅な者が気持を集中して矢を放つが）、ほかざまへ行きければ、あひもたたかはで（狙いとは違う方向へ飛んで行くので、戦い合いにならず）、心ちただ痴れに痴れて、*まもりあへり（兵士たちはただ呆然と、目を見合わせていました）。 *「まもる」は＜じっと見つめる。見定める。番をする。防ぐ。＞と古語辞典にある。

立てる人どもは、装束のきよらなること、物にも似ず（雲の上に立っている月の使者たちは、装束の美しいこと、例えようもありません）。飛ぶ車、一具したり（その隊列には、空飛ぶ牛車が一両ありました）。*ひしやがひさしたり、その中に王とおぼしき人（天蓋傘が差し出されて、その中に全権大使と思われる人が牛車から降り立って）、家に「宮つこまろ、まうでこ」といふに（邸内に向かって「美奴丸、出て参れ」と言うと）、たけくおもひつる宮つこまろも、物に酔いたる心ちして、うつぶしにふせり（勇ましく気構えて居た美奴丸も、宴に酔い痴れたよう

な和み気分になって、塗籠前から正面階段前の縁側まで出て行って、使者に平伏しました）。 *「ひしやがひさしたり」は不明文。「南波校本」では是を＜飛車蓋挿したり（飛ぶ車に張り出し傘が付属していて）＞と解してあるようだ。が、折畳みの幌屋根でも広げたのだろうか、説明不足で場面が描けない。また、「全集」文には「羅蓋さしたり（らがいさしたり；天蓋を差し掛けて）」とあり、従者が使者の後ろから傘を差し出している挿絵掲載もある。が、この本文でそこまでの場面説明は読み取れない。つまり、この文面から場面を想定することは出来ないのだが、続く文意から此処は月の使者が翁を呼び出す場面であることが分かるので、逆に此処の文を場面説明になるように、私なりに分かり易く仮定して言い換えることにした。

いはく（全権大使が言うには）、「*汝、幼き人（其の方、未熟な者よ、よく聞け）。*いささかなる功徳を、翁つくりけるによりて（いくらかの善行を、翁は積んだので）、汝がたすけに、とて片時のあひだ、とおもひて（其の方の助けになるように、少しの期間が其の善行の報いに相当だろうと考えて）、*下したりき、*そこらのこがねを給はりて、身をかへたるがごとなりにたり（下げ与えたものだったが、それがこの国では多くの黄金を賜ることになって、翁よ、其の方は生まれ変わったような高い身分になったわけだ）。 *「なんぢ、をさなきひと」の解釈は諸説あるらしい。私は是を最初に＜其方は幼い者にいくらかの善行を積んだので＞と読もうとしたが、途中の「翁」がどうにも処理できない。その他の読み方も試みたが、結論としてはこの「なんぢ、をさなきひと」は翁に対する高圧的というより絶対優位な立場にある者が、見下すというより判決を最終告知する場面に於ける、被告人に対する呼び掛けと取るのが、私には最も通りが良く見える。「全集」の結論も、この点に於いては同様らしい。いや勿論、これは月の使者の主観からする妥当性なのだが、発言者が月の使者なのだから、その立場に立って考えるのは正しいはずだ。そして、この月の使者は、私にはよく分からないが雰囲気として、まるで仏教の悟りを得た者の説教ような話し方をしているかに見える。その所為か、全体の文意が非常に取り難い。 *「いささかなるくどく」が何を指すのかは不明。このことについては、今まで何も語られていないのに、こういう言い方が突如なされるのは余りに不親切だ。が、仕方が無い。 *「くだしたりき」の終止形は＜下げ与えた、ところが＞という接続意を含む条件項語用で、目的語は「こがね」と見做し、読点で下に続く構文と読んで置く。 *「そこらのこがね」は＜多くの財産＞だが、月の国で僅かに与えた積もりのものが、この国では多くの黄金になった、という意味らしい。

*かぐや姫は、*罪をつくり給へりければ、かく*いやしきをのれがもとに、しばしをはしつるなり（かぐや姫は前世の罪を負っていらっしゃったので、それを滅す苦行修行として、このような卑しいお前の所に、少しの間、留まっていらっしゃったものなのだ）。罪のかぎり果てぬれば、かく

迎ふるを（修行期間が満了して、罪が滅したので、このように迎えに来たものを）、翁はなきなげく、あたはぬ事なり（翁が嘆くのは、筋違いなのだ）。はやいだしたてまつれ（早く姫をお出し申し上げよ）」といふ（と言います）。 *「かぐや姫」を月の使者が「かぐや姫」と呼ぶのは、こう呼ばないと話が分かり難いとはいえ、一度は月の国での名前を示してもらった方が、異相性の説得力を増す演出に思えるが、マァ仕方ない。 *「つみをつくりたまふ」も内実は示されない。前世でのことだから具体内容は分からない、ということかもしれないが、そんな証明不要の言い放しが、仏法説話にせよ、物語継承にせよ、どうして説得力を持って通用するのか私には全く分からない。また、是を＜天上で罪を犯した＞と読むのも、かぐや姫が先に述べた「かたときのあひだとてまうで来し」の罪悪感の無い留学気分の響きにそぐわない。なお、「全集」注に「天人の王が、かぐや姫に敬語を用いているのに注意。姫は月世界の尊い人だったのである。」とあり、私も気になったが、かぐや姫は既に自分を「月の都人なり」と言っていて、その貴族属性は示されていた。むしろ私は、この「王」という言葉遣いに違和感を覚える。 *「いやしきおのれがもと」は本人を前に随分なご挨拶だが、これは翁の卑しさを論う言い方ではなく、それが姫の罪滅修行に当たるという説明を主旨とするものなのだろう。

翁こたへて申〈す〉（翁は答えて申します）。「かぐや姫を、やしなひたてまつること、*廿余年になりぬ（かぐや姫を養育申し上げること、20 年以上になります）。*片時とのたまふに、あやしく成〈り〉侍〈り〉ぬ（それを、少しの間の滞在と仰ったので、事の真偽が怪しくなりました）。また異所に、かぐや姫と申〈す〉人ぞ、おはすらむ（他の何処かに、あなたがお探しのかぐや姫という人はいらっしゃるのでしょう）」といふ（と言います）。 *「にじふよねん」の真偽は判じ難い。此処まで読んで来た限りでは、10 年以上に渡る話のようには見受けられるが、「廿余年」を真とも偽とも言い得る根拠は何も示されていない。「全集」注にはこの点について「かぐや姫が天人でなく、ふつうの子女であることを強調するための、翁の虚言とすべきであろう。」としてあるが、そう言い切れるまでの根拠は薄い。だが、そうであるらしい印象は強い。 *「かたとき」については、「全集」注に「天上の時間と地上の時間の相違する矛盾を追及、天人の言葉じりをとらえて抗弁するのである。」としてある。「言葉じりをとらえて」という言い方からすると、どうやら「全集」の解釈では、此処に「片時」と翁の弁があることを以て、先の使者の弁の「汝がたすけにとて片時のあひだと思ひて下したりき」の目的語を＜かぐや姫＞だと推定しているらしい。その可能性は確かにあるだろう。が、そうと断定するに足るほどに、この「片時」という語は特定語用されているのだろうか。使者の弁では「かぐや姫は（中略）しばしおはしつる」とあって、かぐや姫の滞在期間は＜しばし＞と形容されている。「しばし」と「片時」は日常生活上は同義かと思う。反論を許さない抗弁意の理屈からすれば、相手の「言葉じり」を捉えて攻撃する方法は有効だろうが、翁が抗弁法に則った対応をしているかどうかは、相当に疑問だ。厳密な用語・用法による弁護ではなしに、情に駈られた抗弁であれば、「しばし」と「片時」の混用

は有り得るし、それを文書化する意義は、その混乱ぶりの演出かもしれない。いくらか分が悪い気はするが、この線で行く。

「ここにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、えこそいでをはしますまじ（此処にいらっしゃるかぐや姫は思い病に罹っていらっしゃるので、外にお出かけなされません）」と申せば、その返事はなくて（と翁が申せば、その返事は無くて）、屋の上に飛ぶ車を寄せて（月の使者は屋根の上に浮かんでいる別の牛車を呼び寄せて）、「いざ、かぐや姫、汚き所に、いかでか、久しくをはせむ」といふ（「さあ、かぐや姫さま。もう贖罪期間は終わりましたので、汚れた地上に長居なさることはありません」と言います）。

たて籠めたる所の戸、すなはち、ただあきにあきぬ（すると、かぐや姫を守るべく立て籠めていた邸内の戸という戸は、直ちにすべて開きました）。女のいだきたるかぐや姫、*戸にいでぬ（養母が塗籠で抱いていたかぐや姫は、外に出て雲に浮かんでいました）。えとどむまじければ、ささしあふぎて泣き居り（養母は姫の移動を止めようも無く縁側に追って出て、ただ姫を仰ぎ見て泣いていました）。 *「戸」は「門（出入り口）」ではなく「外（室外または屋外）」で、此処では下文に「さしあふぎて」とあるので、かぐや姫は既に雲に乗って空中に浮かんでいると読んで置く。こういう場面描写は古文では説明不足が多い。当時の常識を前提に省語しているのかもしれないが、常識の無い私には非常な負担だ。

竹取が心惑ひて、泣きふせる所によりて、かぐや姫いふ（竹取夫婦が心乱れて泣き伏せっている階上縁側に、かぐや姫は雲を寄せて言います）。「ここにも心あらで、かくまかるに、のぼらむをだに、見送り給へ（私も不本意ではありますが、これから立ち去りますので、せめて天に昇る私の姿だけでも見送ってください）」といへども（と言うが）、

「なにしにかは、かなしきに、見送りたてまつらむ（どうして、こんな悲しみの中で、お見送り申せましょう）。われをいかにせよ、とて、すててのぼり給ふぞ（どういう理由があるにせよ、私を捨てて昇って行きなさるとは、あんまりな）、具してをはせ（せめて、お連れください）」と嘆きいりてふせれば、*御心まどひにたり（と翁が泣き崩れたので、かぐや姫の御心は困りました）。 *「みこころ」の「御」はかぐや姫に対する尊称らしい。地上人に対する絶対優位性に立ち返った、という表現

だろうか。

「文を書き置きてまからむ。恋しからむ折々取りいで見給へ（手紙を書き置いて行きます。恋しくなったら取り出してお読み下さい）」とて、うち泣きて、かく言葉は（と言って、かぐや姫が涙ながらに書く言葉は）、

「この国に、生まれぬるとならば（私がこの国に生まれていた人であったならば）、*嘆かせたてまつらぬほど（父母さまを悲しませ申し上げないように、お仕え申しますものを）。まて侍らで、過ぎ別れ侍ぬるこそ、返へすがへす本意なく侍れ（それを親不幸にも、去り別れ致すのは、重ね重ね残念でございます）。 *「嘆かせ奉らぬほどまてはべらで過ぎ別れはべぬる」は「全集」文と少しく違う。また、何故か「南波校本」ともほんの少しく違う。是が発言文なら、微妙な言い回しの違いでも、場面の解釈を左右しかねないが、是は文面なので、あまり突飛な表現は考え難いが、それでも、当本文を真じて、この文意を取ろうとするなら、この文は「嘆かせ奉らぬほど。まて侍らで、過ぎ別れ侍ぬる」と校訂したい。即ち、「嘆かせ奉らぬほど」は下に＜仕えまつらむ＞が省かれた、というか感極まって言葉に詰まった激情表現。「まて侍らで」は「待ちて侍らで」の短かとも思ったが、むしろ「持ちて侍らずに＝以ての外にも＝非道にも」という丁寧語の定句と見たい。「過ぎ別る」は＜別れ去る＞。

脱ぎ置く衣を、形見に見給へ（脱いで行く私の着物を形見とお思い下さい）。月のいでたらむ夜は、月を見おこせ給へ（月の出る夜は、月を見上げてください）。見すてたてまつりてまかるは、空よりおちぬべき心ちする（父母さまを見捨てて去り行きますのは、空から落ちるほどの絶望感です）」と書き置く（と書き置きます）。

*天人の中に、もたせたる箱あり（月の使者一行は、中の一人に持たせている箱がありました）。*天の羽衣も入れり（天の羽衣が入っていました）。また、ある箱には、*不死の薬持たせたり（また別の箱には、不死の薬を持たせてありました）。 *「てんにん」と＜月の使者＞が本文に示されたのは初めてだろう。こう呼称することで、かぐや姫と地上の人との関係性が消えて行くことを示すのだろうか。「天人」は古語辞典に＜天上界に住むといわれる想像上の人。＞とあり、また仏教用語として＜天上界に住む女性。頭に華鬘（けまん、インド風髪飾り）をつけ、羽衣を着て天上を飛行し、歌舞に巧みだといわれる。あまつおとめ。天女。＞とある。ざっと、地上人よりマシな世界に住む人、みたいな想念だろうか。しかし、私はこの物語を、中でも特にこの段を、仏教論議と位置付けていて、仮に＜月に人がいる＞として、仮に＜その月の住人と地上人が遭遇する

＞として、仮に＜彼等を天人と呼ぶ＞として、さて＜天人とはどういうものだろう＞と考える一助を、作者の一案を提示することで問題提起しているもの、として読もうとしている立場なので、予断を持った言い方は避けたいと思っている。したがって、私にとっては「天人」は未定義語なので、現に本文にこう在るにも関わらず使う気がせず、なおも＜月の使者＞と呼んで置きたい。また、この「持たせたり」の主語は誰なのだろうか。使者を派遣した月の国の責任者かもしれないが、その正体は語られていないので、使者一行とボカして置く。　*「あまのはごろも」は古語辞典に＜天人の着る衣服。中国の伝説の移入。織物ではなく縫い目も無い。＞とある。地上界のものとは違う布状の何か、を仮称したものと読んで置く。　*「ふしのくすり」は言い方としては＜それを飲めば死なないようになる物質＞で、死という現象は日常にあり、人の死の場合は残る者との別れを伴うことになり、残された者に残念するので、それを避けたい思いも日常にあり、それを可能ならしめる物質の存在を考えることもまた、日常的なものだ。そして実際に、富める者は多くの物質を利用できて楽に暮らせるし、多くの場合、貧しい者より長命だ。だから、最高権力者は最も＜不死の物質に近い＞ように見えるが、その究極の物質は地上人の何人たりと手に入れられない。が、月の国にはそれがある、ということらしい。ならば、「不死の薬」は「天の羽衣」とは違って、その効果が具体的に分かっているものだ。と、言えるのだろうか。しかし、「死なない」という実体を知らない以上、その具体的な意味など分かるはずもない。分からない物ということでは、どちらも同じだ。それに、天上界でも＜死＞は有るとも聞く。ワケが分からない。だから、作者は面白がって是を持ち出したのだろう。

ひとりの天人いはく（月の使者の一人が言うことに）、「壺なる御薬たてまつれ（この壷にある御薬をお飲み下さい）。汚きところの物召したれは、御心ちあしからむ物ぞ（汚れた地上の物を召し上がったので、御体調が悪いことでしょう）」*といひて（と言って、持ち寄ったので）、　*「といひて」は「全集」文では「とて、持て寄りたれば」とある。文意の通りが良いので、此方に従い補語する。

いささかなめ見給〈ひ〉て（かぐや姫はその薬を少し舐めなさってから）、すこし形見とて、脱ぎ置く衣に、つつまむとすれど（その薬を少し、形見として置いて行く着物に、包もうとしたが）、ある天人ありて、つつませず（側に居た使者が、これを包ませません）。御衣を取りいでて着せむ、とす（そして、天の羽衣を箱から取り出して、姫に着せようとします）。

その時、かぐや姫、「*しばしまて」といふ（その時に、かぐや姫は「ちょっと待ちなさい」と言います）。「*衣着つる人は、心異になるなり」といひて（「羽衣を着た人は、地上人とは気持が変わってしまいますから」と言って）、　*「しばしまて」は敬語が無い。相手の天人は侍女身分であるかに

見える。 *「きぬ」は＜天の羽衣＞。「天の羽衣」は＜天人の衣服＞とのこと。是を着ると「心異になるなり」とかぐや姫の弁として、その属性が示される。衣服に思考回路が支配される、みたいにも聞こえるが、そういう儀典機能を衣服・衣裳が持っているという認識は、むしろヒトが衣類に与えた属性とも言える。そう機能するように衣裳を考える、というのは日常行動でもある。だから、これは衣服の属性というよりは、ヒトの属性というべきかもしれない。つまり、かぐや姫が是を言うということは、自分は地上人として死ぬつもりはない、月へ帰ることは承知している、ということを月の使者に伝えた、ということになる。かぐや姫にどれほどの抵抗が出来るのかは分からないが、全く強制的に連行されるようではなさそうで、何か面倒を起こして使者の顔を潰す可能性はあるのではないか。しかし姫は、使者の役目を損なうことはしないから「しばし待て」、と言ったように聞こえる。

「物ひとことは、いふべき事ありけり」とて、文書く（「どうしても一言、言って置かなければならないことがありました」と言って、手紙を書きます）。*天人、「遅し」とて、心もとながり給〈ふ〉（月の大使は「遅い」と言って、早く出発したがりなさいます）。 *「天人」は此処では「給ふ」と敬語遣いされる。この「天人」は先に「王とおぼしき人」と語られた＜全権大使＞なのだろう。

かぐや姫言ふ（かぐや姫は言います）。「かく物おもひしらぬ事なの給そ（そう不親切な事を仰いますな）」といひて、*いみじく静かに、おほやけに文たてまつれ給ふ（と言って、ごくゆっくりと、帝に手紙をお書き申し上げなさいます）。あはてぬさまなり（落ち着いた様子です）。 *「いみじくしづかに」は「全集」注に＜「いみじく」に注意。よいほうについての程度のはなはだしいことを表す。つぎの「あわてぬさまなり」とも呼応して、姫がすでに天人のペースでゆったりと行動していることが知られる。＞とある。月の薬を舐めたので、そうなってきたのかもしれない。が、むしろ私は、このかぐや姫と大使との遣取から、その関係性に同族の親しさがあるように見える。それに、かぐや姫は月への帰国に同意を示しているので、後は別れの儀式をするだけだと大使も心得たのだろう。

「かやうに、あまたの人をたまひて、とどめさせ給へど（子のように多くの兵を遣わしなさって、私を留めさせなさいましたが）、許さぬ迎へ、まうできて、とりいでまかりぬれば、くちをしくかなしきこと（猶予の無い迎えが参りまして、私を引き連れて行きますので、お別れとなりますのが残念で悲しいことです）。

宮つかへ、つかうまらずなりぬるも（お側でお世話申せず終いになったのも）、かくかくわづらはしき身にて侍れは（このような困った事情を持つ身だったからでして）、心得ず、おぼしめさ

れつらめども（ご不満だったでしょうが）、ころろづよく、うけたまはらずなりにしを（強情にお断りしていましたのを）、なめげなる物にのみ、おぼしとどめられぬるなむ（無礼な者とだけ、ご記憶されてしまうのは）、心にいとど、とどまり侍ぬる（この期に及んでも、なお心残りでございます）」とて（と書き記して）

（和歌 14）「いまはとて 天の羽衣 着る時ぞ 君をあはれと 思ひ出ぬる」

（和歌 14、「全集」流布本版）「*今はとて天の羽衣着る折ぞ、君をあはれと思ひ出でける」 *古本と流布本は、三節が「きるときぞ」と「きるをりぞ」、五節が「おもひいでぬる」と「おもひいでける」の違い。「思ひ出でける」は理屈っぽく、「思ひ出でぬる」は情緒っぽく聞こえるが、帝に言うこの「あはれ」は恋情だろうか。文面も、敬意は表しているが、形式に付き合っているだけかもしれないし、悪く言えば＜言い訳＞であって、情感は無い。最後に好意を示したのか、最後まで儀礼で通したのか。とにかく可愛い女ではない。

（換歌 14）「いろいろと ほんとにどうも ありがとう」

ときこえて（と贈歌して）、壺の薬添へて、*頭中将をよびよせて、たてまつらす（壷の薬を添えて、軍指揮官のタカノノオオクニを呼び寄せて、帝に差し上げさせます）。 *「とうのちゅうじゃう」はこの場の軍指揮官のことだろうから、それに任じられた人物は勅使少将の高野大国だろうに、何故彼は此処で「頭中将」と呼ばれるのか。「頭中将」は蔵人所の長官（筆頭者）にして近衛府の中将という高官だ。尤も、蔵人は帝の執事なので、それ自体に独自の行政権限があるわけではなく、筆頭と言っても特段の権力者を意味しないが、帝に親しい人物として組織内部では尊重されるし、実際に帝の近親者以外は就けない地位だ。また、近衛中将は大将に次ぐ次官だが、大将は政治家だから、実際の軍事最高指揮官という文字通りの権力者だ。だから、蔵人の頭（くらうどのとう；頭をカミと呼ばずトウと呼ぶのは蔵人所だけで、その権威性が示されているとのこと）にして近衛中将というのは、普通の臣下を超えた帝に真に近い朝臣ということになる。が、だからと言って先に勅使少将と呼んだ人を此処で頭中将と言い換える理由は、写本筆記者の何かの思い込みによる仕業以外には合理性が見つからない。で、その思い込みが何かは今となっては闇の中らしいが、この「頭中将」の語が記されていることが、現行竹取物語の成立年代を探る上で大きな手掛かりとなっている、との解説が広くなされているようだ。というのは、蔵人所の開設は弘仁元年（こうにんがんねん、810 年、嵯峨天皇）なので、物語成立はそれ以降に限定される、ということらしい。

天人、とりてつたふ（侍女天人が取り次ぎます）。中将とりつれば（中将がそれを受け取ったので）、ふと天の羽衣を、着てたてまつりつれば（別の侍女天人がかぐや姫に、サッと天

の羽衣をお着せ申し上げると）、「翁いとをし」とおぼしつる心もうせぬ（「養父に相済まぬ」とお思いだった気持も消えてしまいました）。

この衣着つる人は、*物おもひなくなりぬれば（この天の羽衣を着た人は、地上での思い残しが無くなってしまうので、是を以て地上での手続きは完了したものと打ち切り）、車に*のせて（月の大使はかぐや姫を、車に乗せて）、*百人ばかりの天人に*具してのぼりぬ（その車を、百人ほどの迎えの隊列に組み揃えて、月に上っていきました）。 *「ものおもひなくなりぬれば」は敬語遣いが無い。一般論と読んで置く。が、此処で言う「物思ひなし」とはどういうことなのか。「悩みが無い」という言い方は勿論あるが、それが意味するところは、諸問題に手当てが付いている、ということであって、その限りで、差し当たっての問題が無い、今は懸念が無い、という言い方にはなっても、物質変換の連続の中で存在している生身の生物にあって、自己と他との関係性認識を＜広く問題＞と言い、その中でも特に対処の難しいものを＜狭く問題＞と言うならば、「問題というものが無い」ということは＜状況認識能力が無い＞ということに外ならない。月の宮処人たるかぐや姫にあっても、実の父母との親子関係を認識し、その種族維持が雌雄両性の性交によって遺伝子継承される仕組みとなっているなら、地上人との性交は獣姦の類として退けるにしても、同国人との人間関係は真剣に考えなければならないはずだ。だから、此処でかぐや姫が断ちきれる＜悩み＞とは＜地上人との関係での諸問題および問題意識＞に限られる。と私は考えるが、作者がどういう構想でこれを言っているのかは、判定しきれない。それでも、次の「車にのせて」の妥当性を説明するには＜悩むということが無くなる＞と言うのではなく＜地上での思い残しが無くなる＞とまで言うべき、かと思う。 *「のせて」の主語は月の大使と読んで置く。 *「百人」も居たとは意外だった。先に聞いていれば、この一行の印象はずいぶん迫力あるものになっていたような気がする。尤も、地上軍の二千人も忘れていたが。 *「具す」は自動詞（連れだって行く。加わる。）か、他動詞（連れて行く。加える。）か。「南波校本」では、「天人に」の格助詞「に」があることで、かぐや姫は迎えの一行に＜加わって行く＞という文意の自動詞となる、と解説されている。確かに、格助詞「に」が無い「全集」文の「天人具して」の訳文は＜（かぐや姫が）天人を引き連れて＞と他動詞に取ってある。が、私はこの文を、そも月の大使を主語に据えて読んでいるので、格助詞「に」が在っても無くても、是は他動詞と読む他はない。だから、「天人具して」なら＜大使が天人を引き連れて＞だし、「天人に具して」なら＜大使がかぐや姫を天人に加えて＞と読むことになる。格助詞の有無は目的語が＜天人＞になるか＜かぐや姫＞になるかの違いで、古本本文には「に」があるということで、此処に目出度くかぐや姫が目的語となった次第だ。

（第十段）ふじの煙

そののち、*翁も、血の涙を流して、*よばへどかひなし（その後で、翁も血の涙を流して、か

ぐや姫の名を呼び続けたが、声の届くはずもありません）。 *「翁も」の「も」は誰との類似を示す助詞か。妻を挙げたい所だが、それらしい前フリの記述は無い。となると、かぐや姫と同様に、ということになりそうだが、かぐや姫は地上との縁を断ち切って月へ帰ったので、もう、同様とか類似とかは言い難い。が、それは読者の引いた目線であって、翁にしてみれば、姫と同様に悲しいと思いたい、のかもしれない。一応、そう取って置く。 *「よばふ」は古語辞典に＜「呼ぶ」に継続の助動詞「ふ」がついてできたもの＞と解説があり＜呼び続ける。求婚する。言い寄る。＞と語用例示がある。

*かの書き置きし文、読み聞かせければ（勅使が正式にかぐや姫から受け取って、改めて添えられた少しの不死の薬と姫の着物と共に、翁に手渡された姫の置き手紙を、女房が翁に読み聞かせたが）、「何せむにか、命をしからむ（不死の薬が何になる、命など惜しいものか）、たがためにか（誰のために苦労したのか）。なに事も、なにかはせむ（もう全てが意味が無い）」とて、「用なし」とて、薬も食はず（と言って、翁は不要だからと、かぐや姫が置いて行った不死の薬も飲みません）。やがて、起きもあがらで、やみふせり（そのまま、起きあがることもなく、病床に伏せってしまいました）。 *「かの書き置きし文」はかぐや姫が「脱ぎ置く衣を形見に見給へ」と書き置いた手紙だろうが、この手紙はいつ手渡されたのか。かぐや姫は手紙を書き置いてから、上着を脱いで、その上着に不死の薬を少し包んで翁に渡そうとしたが、側に居た天人に薬を包むのを止められた。そして天人は、すぐに天の羽衣をかぐや姫に着せようとした。が、その時、かぐや姫は天人を制止して、帝への手紙を別に書き始めた。そしてかぐや姫は、個人的な便宜ではなく、使節団の公式な儀式として、地上の代表者たる指揮官を呼び寄せて、取次係を立てる様式に則って、不死の薬を謝礼品として添えて、帝へ手紙を差し上げた。そして今、竹取翁はかぐや姫の手紙を女房の代読で聞いている。この手紙はいつ手渡されたのか。接点は一度しか無い。タカノノオホクニは帝への手紙と不死の薬と、それから翁への手紙とかぐや姫の着物とを、取次係から受け取っていた、としか思えない。かぐや姫は帝への手紙を書くときに「あわてぬさま」で時間を掛けていた。上着に薬を包むのは止められたが、上着に手紙と薬を添えて贈り物の体裁を整えることは、公式な儀礼としてなら許されたし、それを整える時間もあった、と読まないと、この場面が説明できない。で、この場面でそうした事情を説明するには、多くの補語を要するが、それは私の冒険ではなく、本文の不備の所為である。

中将、人々ひきつらねて、かへりまゐりて（指揮官のタカノノオホクニは兵士を引き連ねて、御所へ帰参し）、かぐや姫を、えたたかいとめずなりぬるよしを、こまごまと奏す（かぐや姫を、月の使者たちと戦って引き留めることができなかった事情を、詳しく奏上します）。

薬の壺に、文を添へてまゐらす（そして、不死の薬が入った壷に、かぐやいめの手紙を添えて帝に献上します）。ひきあけて御覧じて、いとど、いたく、あはれがらせ給ふ（帝は手紙を引き開いてお読みなさり、ますます深くかぐや姫の喪失を感じ入らせなさいます）。物聞こしめさず（食事もお摂りなさいません）。こと御あそびなどもなかりけり（戦労いの音楽会なども、特には催されませんでした）。

大臣・上達部をはじめて、とはせ給ふ（そして帝は、大臣や政府高官をはじめ、諸賢人にお尋ねなさいます）。「いづれの山か、天は近き」と（「どの山が天に近いのか」と）。

ある人、答へて奏す（列席者の一人が答えて奏上します）。「駿河の国なる山なむ、この宮もちかく、天もちかく侍なる」と奏す（「駿河の国にある山が、御所からも近く、天にも近うございます」と奏します）。

これをきかせ給〈ひ〉て、かぐや姫の歌の*返〈へ〉し、かかせ給〈ふ〉（帝は是をお聞きあそばして、かぐや姫の贈歌への返歌を詠んで、側近に書かせなさいます）。 *「かへし」と言っても、かぐや姫に返歌を届ける術はない。御門自身の気安めに詠んだもの、ということなのだろう。

（和歌 15）「あふことの 涙にうかむ 我身には 死なぬ薬も なににかはせむ」

（和歌 15、「全集」流布本版）「*逢ふことも無みだに浮かぶ我が身には、死なぬ薬も何にかはせむ」 *古本と流布本は、一節が「あふことの」と「あふことも」、二節が「なみだにうかむ」と「なみだにうかぶ」の違い。「逢うことの無い」と「逢うことも無い」の違いは、「逢うこと」が不確定なら「の」は客観事実を示し「も」は意志を示すので、「も」の方が否定意が強いようにも見えるが、この場合のように、「逢うこと」が絶対に不可能と確定していたら「の」の事実認識が正しく「も」の意志は空回りして間抜けだ。「なみだに」は＜無みだに（無いので）＞と＜（悲しくて泣いた）涙に＞の掛詞。「浮かむ」は＜浮かぶ＞。「浮かぶ」は＜落ち着かない。安定しない。＞。良くできた理屈オチだ。

（換歌 15）「つらいのに 死ねないなんて つらすぎる」

かのたてまつれる、不死の薬の壺添へて、御使に給はす（かぐや姫の手紙と帝の返歌とに、献上された不死の薬の壷を添えて、帝は御使者に渡しなさいます）。勅使遣はす（勅

使として差し向けなさる）、月のいはかどといふ人を召して（月氏岩門という人を呼び出しなさって）、かの駿河の国にある、山のいただきへ、もて*とづくべきよしおほせ給ふ（その駿河の国にある山の頂きへ持って届けるように命じなさいます）。 *「とづく」は古語辞典に＜「届く」の古語＞とある。

みねにてすべきやうを、教へ給〈ふ〉（そして、山頂で為すべき事を教えなさいます）。文、不死の薬の壺をならべて、火をつけて燃やすべきよしを、おほせ給ふ（手紙と不死の薬の壷を並べて、火をつけて燃やすように命じなさいます）。

そのよしを、うけ給はりて、つはものども、あまた具してなむ、かの山へはのぼりける（その燃やす時の様式を承知仕って、勅使は兵士を大勢引き連れて、その山へ登ったのです）。

その不死の薬を、焼きてけるより後は、かの山の名をは、ふじの山とは名づけける（そのように「豊富な兵士」で登山して、頂きで「不死の薬」を焼いた後は、その山の名を「富士の山」と名付けたのです）。

いまだ、その煙、雲の中へたちのぼるとぞ、いひつたへたる（そして、「不死の薬」を焼いたので、今だにその煙が雲の中に立ち昇るのだと、言い伝えられているのです）。

*もむけとゝせ（文化十年）あまりふたとせ（と二年）

なかつきころうつす（長月頃写す）　ながとき（永時）

*「もむけ」は＜文化＞。「とゝせ」は＜十年＞。「あまり」は＜と＞。「ふたとせ」は＜二年＞。通せば＜文化十二年、1815 年、光格天皇、徳川家斉＞、曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」が始まったくらいの幕末前夜の時代。「ながとき」はこれを写本した人の名前らしいが、仔細不詳とのことで、「永時」は私の個人的な当て字遊び。さて、この写本筆記者のメモを「奥書」というようで、是が在ることの資料価値は、特にこの「竹取物語」にあっては現存写本が少なく、古本系統の全文写本はこの新井本が唯一のものという厳しい状況で、非常に貴重だと言う。このことについての解説は「南波校本」によって得た。

（２０１４年８月４日、読了）